

## 目次

## 参考文献について

1. 銭超塵『中医古籍訓詁研究』…………… 1
2. 銭超塵『内経語言研究』…………… 1
3. 銭超塵『黄帝内経太素研究』…………… 2

## 第1節——古医籍訓詁の問題点

1. 『太素』楊上善注——単語訓詁の問題点…………… 4  
①佩 ②能 ③如 ④都 ⑤居 ⑥卒
2. 『素問』王冰注——望文生義の問題点…………… 8  
①央 ②里 ③谷 ④保 ⑤徇蒙招尤 ⑥宗 ⑦復
3. 『素問』新校正注の反省——通仮の認識…………… 13  
直接的指摘 ①央…………… 16  
校勘的指摘 ②募 ③徳 ④仆 ⑤疑…………… 16

## 第2節——古医籍における通仮…………… 18

1. 同音通仮…………… 22  
①皆—偕 ②湊—膝 ③薄—迫
2. 近音通仮…………… 25  
[1] 双声通仮…………… 25  
①在—察 ②報—赴(疾) ③臨—隆 ④中—当 ⑤無—亡 ⑥比—自(粒)
- [2] 疊韻通仮…………… 28  
①渾—滾 ②虫—疼 ③耆—嗜 ④堅—腎
- [3] 非双声・非疊韻の類音通仮…………… 30  
①州・周一竅 ②隋—脰

付、「古今字」および「約定俗成」について

1) 古今字のこと	33
寫—瀉    欲—慾    張—脹    連—輦	
2) 約定俗成のこと	35

### 第3節——古医籍における韻例

1. 韻位	37
[1] 韻脚	37
[2] 虚字脚	38
2. 韻式	39
[1] 隔句韻例	40
[2] 隔第三韻例	42
[3] 連句韻例	44
AA式    AAA式    AAAA式	
[4] 交錯韻例	45
ABAB式 (両韻互協例)    ABBA式 (両韻隔協例)	
付、句中韻例および句首韻例について	48

### 第4節——古医籍における音韻と校勘

1. 古韻による校書の方法	49
2. 古医籍における失韻例	51
[1] 字誤例	51
[2] 字倒例	54
[3] 字衍例	57
[4] 字脱例	58
[5] 句読誤例	60

# 参考文献について

「中国医籍音韻学」と題して2000年秋より『医古文』下編・第3章「音韻」全6節(20頁)を講読し、2001年11月に終了した。しかし、古医籍における音韻現象の研究に欠けていたので、これまでを「上・基礎知識篇」とし、これより「下・古医籍音韻研究篇」に入る。

われわれが学習の参考にできる古医籍音韻研究資料として次の3点にまさるものはなく、まずその概要を見て、下篇の説明としたい。

## 1. 銭 超塵『中医古籍訓詁研究』(貴州人民出版社、1988年)

### 第2章 訓詁の核心——詞義を解釈する

#### 第1節 詞義を解釈する方法

#### 2. 因音求義(音に因て義を求める)

(1) 本字本義を探求する——仮借字は次の兩類に分けられる。

①古音が同じだったので通仮する。

里一理など『素問』6例、常一当『傷寒論』1例。

②古音が近かったので通仮する、3種あり。

[1] 双声通仮：『素問』2例、『靈樞』1例、『傷寒論』2例他。

[2] 疊韻通仮：『素問』3例、『五十二病方』1例。

[3] 類音通仮：州一竅など『素問』4例他2例。(以上13頁)

## 2. 銭 超塵『内経語言研究』(人民衛生出版社、1990年) 中編 音韻

### 第3章 『内経』音韻研究の歴史回顧(17頁)

清朝の考証学者たちが上古音韻の研究から『内経』の音韻が上古音に属していたことを明らかにしたことを紹介する。

### 第4章 音韻上より『内経』の成書年代を考察する(43頁)

『内経』の押韻から『内経』の音韻は上古音に属していたこと、さらに先秦まではさかのぼらない漢代のものであったことがわかる。

## 第5章 音韻と校勘 (9頁)

1. 妄改字や写誤字による失韻あらば古韻により正すべし。

『素問』4例、『靈樞』2例、『太素』1例。

2. 字倒による失韻あらば古韻により改めるべし。

『素問』5例、『靈樞』5例。

3. 字脱による失韻あらば古韻により補正すべし。

『素問』脈要精微論「渾渾革」は「渾渾革革」1例。

4. 句読の誤りによる失韻あらば古韻により句読を正すべし。

『素問』宝命全形論「余念其痛、心爲之亂惑、反甚其病」1例。

5. 増字による失韻あらば古韻により衍文を刪去すべし。

『靈樞』終始「凡刺之屬、三刺至穀(氣)」1例。

## 第6章 『内経』の韻例 (17頁)

『内経』における韻位(韻脚・虚字脚)や韻式(6種)の実例。例えば「之字脚」25例、「也字脚」5例、「耶字脚」6例、「O A O A」式46例、「A A O A」式23例、「A A、A A A、A A A A～」式29例、「A A B B」式6例、交錯式5例。

### 3. 銭超塵『黄帝内経太素研究』(人民衛生出版社、1998年)

#### 第6章 『太素』古韻と韻による校勘 (64頁)

##### 第1節 清儒の『内経』音韻研究と応用 (21頁)

1. の第3章中医古籍訓詁史略 第8節 清儒の医籍訓詁への貢献(63頁)を短くまとめたものに、2. の第3章を加えた内容にほぼ等しい。新たに加えられたものに、『内経』音韻研究史の空白を埋める先人たち、『読書余録』の俞曲園(1821~1907)の教を継ぐ沈祖綿『読素問臆断』(1923)他の業績を紹介、著者の恩師とおぼしき劉衡如『靈樞』校本(1962)などを挙げ、『内経』を古韻研究に用いた学者たちとは別の、古韻研究を『内経』研究に用いた孫詒讓や于鬯の系譜に入れる言及がある。

##### 第2節 『太素』音韻概況 (7頁)

北宋が金に破れて朝廷が南渡したいわゆる靖康の難で『素問』『靈樞』の旧本が失われてしまったのに対して、『太素』は保存状態がよく、『素問』『靈樞』で失われた韻字が正しく引き継がれている。

### 第3節 『太素』の古韻で『素問』『靈樞』の失韻を校す (25頁)

2の5章にならい、字誤失韻・字倒失韻・字衍失韻・字脱失韻・句読誤失韻と手際よく分類し、『太素』を基準に校勘する。

### 第4節 『靈樞』『素問』の古韻で『太素』の失韻を校す (5頁)

『太素』の失韻の研究はまだ端緒についたばかりだが、『靈樞』『素問』古韻をもとにその一端を示す。

### 第5節 『太素』韻例 (6頁)

『太素』における韻位では「之・止字脚」5例、「者・也字脚」4例、韻式では「A A O A」5例、「O A O A」5例、「A A・A A A・A A A A」(連句韻) 10例を挙げる。

錢氏は『黄帝内経太素研究』第6章第1節「清儒の『内経』音韻研究と応用」の中で先人である沈祖綿氏の次の言葉を紹介している。

(『素問』は) 詞句が古奥で、世の人は難治の書とと思っているが、その実は非である。その門が判らないまま入ろうとするから、「難治」の2字を口にするのだが、もし先に訓詁を明らかにし、次いで章句を明らかにしたならば、真理はここに得られ、治すことも易々となろう。

そして錢氏はついで「音韻と訓詁は表裏一体のものであるから、そこで沈氏もまた常に古韻をもって『内経』を校していた」と記している。

錢氏の『内経』研究もまた、まさに考証学の古韻研究的『内経』研究を引継いでいるといえよう。

# 第1節——古医籍訓詁の問題点

## 1. 『太素』楊上善注 —— 単詞訓詁の問題点

楊上善が『黄帝内経太素』の編集および注釈の仕事を完成したのは唐・高宗の乾封元年(666)から至道元年(683)の間とされる。その後、中国では北宋末の靖康の難(1127)の頃に失われたものとされていた。

わが国の白鳳時代、大宝律令(701)に医制を記した医疾令があり、医学教科書を規定した条項に「『甲乙』『素問』『本草』『黄帝針経』などの記述があるが、成ったばかりの『太素』は渡来以前だったのか。

平安時代になると、宮中の火災による書籍焼失をきっかけに作られた『日本国見在書目録』(895)に「『内経太素』30 楊上善撰」の記述が見える。また『延喜式』(927)の典薬寮の部には医学学習法の規定条項として「凡そ応に医経を読まんとする者は『太素経』は四百六十日に限ると、『太素』は『素問』や『甲乙』にとって代わる教科書となっていた。

時は流れて文政10年(1827)、京都の仁和寺から平安時代末古鈔の『太素』が発見され、再び世に出ることとなり、日中両国の『太素』研究新時代が始まったというわけである。

『太素』編注者の楊上善は、『旧唐書』経籍志だけを見ても『太素』と『明堂』の他に現在では失われた『老子道德経略論』『莊子注』『六趣論』『三教銓衡』など多くの儒・仏・道にわたると見られる経学関係書を著している。『太素』注に引用される医書以外の文献は『説文』数十例を筆頭に『周易』『老子』『莊子』『山海経』『国語』『呂氏春秋』『史記』『淮南子』など正統的である。『太素』各巻頭の題記は「通直郎守太子文学臣楊上善奉勅撰注」とある。ちなみに「太子文学」は『大唐六典』では「文学三人、正六品」で、「典籍の讐校を掌る」官であった。

また楊上善の訓詁の特徴は、事物の命名の起原を解釈する「名物訓詁」に優れていて、古今独歩といわれる。

しかし、楊上善の音義にわたる注解作業にも限界があった。前後関係を問題としない文字注釈「単詞訓詁」において、錢氏が指摘するもので音韻知識に関わるものだけでも

次のような誤釈があり、それは『太素』楊上善注の影響の大きさからも、些細な問題では済まされないものとするられるので、補足説明を加える。

### ① 佩

- 「道者、聖人行之、愚者佩之」聖人得道之言、行之於身、寶之於心府也。愚者得道之章、佩之於衣裝、寶之於名利也。——『太素』卷2 撰生・順養

胡石生(1825~1872)は『素問校義』で「案、佩讀爲倍。『説文』“倍、反也”とする。また「倍」は經典を通じて「背」にも作るともいう。經文の言うところは「聖人行之、愚者佩之、謂聖人行道、愚者倍道也」である。また「從即行、逆即倍也」と。なぜならば「古人之文恒多假借、不求諸聲音、而索之字畫、宜其詰鞠、爲病矣」だからである。詰鞠とは文義が迂曲で通じ難いこと。望文生義の病の戒めとしている。

ちなみに「倍」は「反」が本義であった。『素問校義』の指摘は似たような誤りを犯した王冰注への批判である。

### ② 能

- 「能夏不能冬」寒人遇熱、故堪能也。——『太素』卷3 陰陽

『漢書』晁錯伝「夫胡貉之地、積陰之處也、木皮三寸、冰厚六尺、食肉而飲酪、其人密理、鳥獸毳毛、其性能寒」の顏師古注「能、讀曰耐」とあるようにこの場合も耐の同音同義である。能と耐は声母が同じ「泥」母で、さらに上古音では耐(切韻代)は之[ə]部、可能の能(切韻蒸)は蒸[əŋ]部であり、陰(耐)陽(能)対転関係であった。能字は可能の能では泥母で切韻蒸(ドウ)、耐の意味では泥母切韻代(ダイ)と読まれた。その他にも能には透母で切韻咍(タイ)の読みがあり、この場合は態の意味となる。次の2例の能の場合は態と同音同義である。

- 此陰陽更勝之變、病之形能也。——『素問』陰陽応象大論
- 五藏風之形状不同者何、願聞其診、及其病能。——『素問』風論篇

### ③ 如

- 「體若燔炭、汗出如散」汗如沐浴、汗不作珠、故曰“如散”也。

——『太素』卷3 調陰陽

この部分を『素問』生氣通天論篇では「汗出而散」に作ることも明らかなように、

この「如」は順承連詞である。『荀子』儒效の「天下之道畢是矣。郷（向）是者臧（善）、倍是者亡。郷是如不臧、倍是如不亡者、自古及今、未嘗有也」というのは注に「如字俱讀爲“而”」とあり、「是に郷いて臧しからず、是に倍きて亡びざる」であることが判る。

『韓非子』五蠹の「皆就安利如辟危窮」も「安利に就きて危窮を辟く」でなければ意味が通じない。『経伝釈詞』巻7は「如、猶而也」として27行の用例と注を挙げる。例えば「莊七年『傳』曰“星隕如雨、與雨偕也”」と例文を挙げ、参考に「劉勣曰“如、而也”。星隕而且雨、故曰“與雨偕也”を引く。注に「見『漢書』五行志」と出典を挙げる。『春秋』莊公七年四月辛卯の条に「夜不見恒星、夜中星隕如雨」とあり、『左伝』はその政治宣伝的寓意を付加して「與雨偕也」と記し、劉勣はその意味を説明して如は而であるという。『春秋繁露』王道通三「施其時而成之、法其命如循之」は対偶で、而と如が対応する。如と而は声母がいずれも「日」母で双声。

#### ④ 都

##### ●「潰潰乎若壞都」陽氣煩勞、則精神血氣亂、若國都亡壞、不可止也。

（注：陽気が煩勞すると精神血気が乱れ、あたかも国都が滅亡・崩壊したときのようにもう止めようがない。）——『太素』巻3 調陰陽

『素問』生氣通天論の陽氣過剰による「煎厥」病の記述、「目盲不可以視、耳閉不可以聽」に続く箇所。さらに「汨汨乎不可止」と続いて「精絶」の形容であることに注意するとよい。

「汨汨」は『漢語大詞典』巻5に「象声詞。水その他の液体が流れる音を表す」（1990年版、964頁）とある。すると一方の「潰潰」も同じく巻6に「①壊乱。②怒る貌。」に続いて「③水流の貌」（同、140頁）とあることがヒントにならないか。漢・劉向『説苑』雑言の「泉源潰潰、不釋晝夜」という用例がある。

「都」では巻10に「⑨水流が匯聚する。また水流が匯聚している所を指す」とある。用例は『管子』輕重甲「立員都、立大舟之都、大身之都有深淵、壘十仞」注に「都、瀦皆通」とある。「員都」は円池で、大舟を浮かべ、深い淵があって岸までの深さは十尋（八十尺）もある。

また多紀元簡『素問識』では『礼記』鄭玄注に「南方謂都爲豬」とあるのを引く。「都」が貯水池を意味する古代の雅言（標準語）であり、「瀦」は南方方言であったらしい。するとこの経文は「ざあざあと決壊した貯水池のようだ。ざぶざぶと止めようもない」

という意味になる。

## ⑤ 居

- 「骨癩疾者、頷・齒・諸輪・分肉皆滿、而骨居汗出」居、處也。

——『太素』卷30 癩疾

「骨居」は『靈樞』癩狂も同じだが、『甲乙』11—2および『千金』14—5「骨倨強直」に作る。多紀元簡『靈樞識』は『考工記』（『周礼』冬官司司空第6が失われたために補われた書）を引いて「骨倨」は強直の意味であるとする。『考工記』の「倨」は「戈」が長さ4寸であるのに対し、長さ6寸の胡の微直であるものをいう。『爾雅』積畜「逆毛居」（馬の逆毛で立っているもの）の『經典積文』注などに「居」に直の意味があるとし、居・倨は通じる。通じるというのは「居」は「居る」の意味では平声に読まれるが、ここでは「倨」と同じく去声に読まれるということである。郭霽春『黄帝内経靈樞校注語訳』は「強直」2字は「倨」字の注であったものが誤って正文とされたもの（大字竄注、馬繼興『中医文献学』上海科学技術出版社、428頁参照）という。

「骨居」は「骨のみ居り」（瘦せて骨だけになり）ではなく、「骨格が強直し」（郭霽春）のほうがよい。なお「居」が直の意味になることは卷15五臟脈診「死心脈來、前曲後居」の注に「居、直也」とあることから、楊上善が知っていたことも確かである。

## ⑥ 卒

- 「病在骨、卒鍼藥熨」卒、窮也。痛痺在骨、窮鍼深之至骨、出鍼以藥熨之、骨病痛深故也。

（注訳：「卒」は窮である。痛痺が骨にあるので、鍼を窮め深く骨までとどかせ、鍼を出し薬を用いて熨法をおこなう、それは骨が病み、痛みが深いからである。）——『太素』卷24 虚実所生

『素問』調經論および『甲乙』7—5ならびに「卒」を「焮」に作る。「焮」は『靈樞』寿夭剛柔に「刺布衣者、以火焮之、刺大人、者、以藥熨之」（平民を治療するときは火を使った焮鍼を行い、貴族を治療するときは薬を使った熨法を行う）、また官針第7に「九日焮刺、焮刺者、刺燔針、則取痺也」（九に焮刺という、焮刺というのは焼き鍼を刺して痛みを取り除くのである）とあるものである。

「卒」は入声で月韻精母（清—無気音）だと「兵士」、月韻清母（次清—有気音）だと「突然」、質韻精母だと「終わる」の意味になる。一方の「焮」は去声で隊韻清母（さ

い) であり、そのいずれとも異なり、通じることはないかのようだ。しかし『漢語大詞典』巻1には「卒」の音に隊韻清母があり、『礼記』燕義では「倅」に通じ、また『管子』宙合では「萃」に通じるとしている。

## 2. 『素問』王冰注 ——望文生義の問題点

啓玄子王冰撰「素問序」には「時大唐宝应元年歳次壬寅序」の記述がある。「宝应」は唐・代宗の年号で、元年は確かに壬寅で西暦762年に当たる。この年号は初～盛唐期が終焉を迎え、中～晩唐期の始まった年として記憶されるが、9年におよんだ安史の乱は大きな社会変動の原因となり、思想史的にもまた文学史の上でもこの年を境にして時代区分がなされる、いわば節目の年なのである。

また同序に「時於先生郭子齋堂」(その時、先師である郭子の齋堂で) という「先生郭子」は王冰に教えを授けた人のようである。同序に「別撰玄珠、以陳其道」(別に『玄珠』を著して、その原理を述べた) という『玄珠』は王冰の著作『玄珠密語』のことである。その『玄珠密語』王冰序に「得遇玄珠、迺師事之」(玄珠に会うことができ、その人に師事した)、また「余即遇玄珠子、與我啓萌、故自號啓玄子也」(私は玄珠子が私を啓蒙してくれるのに会ったので、そこで自ら号して啓玄子という) とある。「素問序」によれば王冰の師は姓を郭といい、「玄珠密語序」によれば「玄珠」と号したようである。

王冰について不明のことが多い。王冰の名を、宋・晁公武『郡齋讀書志』および同・陳振孫『直齋書録解題』に「砮」に作るが不明である。

王冰を「王太僕」と称するのは、宋・林億が唐『人物志』を引いて、「冰仕唐、爲太僕令、年八十餘以壽終」(王冰は唐朝に仕え、太僕令となり、80才の寿命を全うした) とするのによる。しかし『大唐六典』では迎賓館に当たる「太僕寺」の長官は「太僕卿」であり、この「太僕令」も不明である。

錢超塵『中医古籍訓詁研究』(前出) は王冰注の訓詁には3つの特徴があるとする。

### 1) 王冰注は比較的厳密に漢代儒者の「訓詁条例」を遵守している。

「読為」は仮借をあらわし、「当読」は校訛字を意味する。

- 「氣虚宜掣引之」掣、誑為導。 ——『素問』陰陽応象大論
- 「令人善忘」忘、当誑怒。 ——『素問』玉機真藏論

「詳略互見」の法。似たような文が前後にあるとき、一方に詳しく説明して他方を略し、細心な読者は前後参照して読めばよいもの。

- 「冬傷於寒、春必温病」冬寒且凝、春陽氣發、寒不為釋、陽怫於中、寒怫相持、故為温病。 ——『素問』生氣通天論
- 「冬傷於寒、春必温病」夫傷於四時之氣、皆能為病、以傷寒為毒者、最為殺病之氣、中而即病、故曰傷寒、不即病者、寒毒藏於肌膚、至春變為温病、至夏變為暑病、故養生者、必慎傷於邪也。 ——『素問』陰陽応象大論

2) 王冰注は語法現象の分析を取り入れている。

- 「石之則狂」石、謂以石鍼開破之。 ——『素問』腹中論

「石」は通常用いられる名詞的用法ではなく、石針で切開する意味の動詞であることの注記である。

- 「穀生於精」穀生於精、言穀氣化為精。 ——『素問』評熱病論

「於」という介詞が「～から」という出自をあらわすものではなく、「～を」という対象を表すものであることの注記である。

- 「下為鶩溏」鶩、鴨也、言如鴨之後也。 ——『素問』至真要大論

「鶩」はアヒルのことで、「如鴨之後」(アヒルの便のような)とはアヒルの糞のような状態の下痢便をいう。「鶩」は名詞であるが、主語ではなく、「溏」の状態を形容する状語であることをいう。

3) 王冰注は文詞典雅で風格がある。

- 「迎浮雲莫測其極」浮雲飄泊而合散、故迎之莫測其邊涯、言蒼天之象(……)運化之道、猶雲莫測其去留、六氣深微、其於運化、當如是喻矣。

(注記：空に流れる雲は離合集散してとめどもなく、そこでそれを眺めても限界を知ることができないというので、大空のようすというのは(中略)運行変化の原理が、雲の変化を知ることができない

ようであるとして、また六気の深遠微妙な運行変化を譬えているのである。）

——『素問』六微旨大論

そして王冰訓詁の重大な欠点をいえば、それは王冰が厳密には同音（あるいは近音）通仮の現象を把握していないことである。

### ① 央

#### ●「筋脉沮弛、精神乃央」央、久也。……筋緩脉潤、精神長久

（注訳：「央」は久しいである。筋が緩み脈は潤い、精神は長久である。）——『素問』生氣通天論  
確かに「央」には久遠の意味があり、『素問』四氣調神大論「與道相失、則未央絶滅」の王冰注「央、久也、遠也」は正しい。しかし「味過所傷」の病証を論じる文章としては適切でない。「沮」字を潤うとするのは去声で湿の意味があるからだが、ここでは上声で敗壞の意味。央は殃に通じ、漢・無極山碑「來福除央」や『老子』52章「無遺身殃」の馬王堆本「毋遺身央」参照。殃もまた敗壞を意味し、胡石生『素問校義』（前出）も「沮弛央三字、義相近」として『素問』の文例「形體毀沮」（疏五過論）と「精氣弛壞」（湯液醪醴論）を挙げる。兪曲園『讀書余録』は『楚辭』注から「央、盡也」を引いて「精神乃央、言精神乃盡也」とする。

### ② 里

#### ●「天有八紀、地有五里」五行爲生育之井里、八風爲變化之綱紀。

（注訳：地の五行は生育の郷里、天の八風は変化の原理である。）——『素問』陰陽応象大論  
「里」は25戸で井戸を共有したので「井里」という。しかし『太素』三陰陽で「五理」とし、また本篇下文で「天之紀、地之理」とする。兪曲園は「里當爲理、紀與理同義。天言紀、地言理、其實一也」とする。

「里」と「理」は紙韻来母の同音。『孫子』九地「人情之理、不可不察」を銀雀山漢墓竹簡で「人請之里、不可不口」に作り、古代には「里」と「理」の2字が通用したことが知られる。

### ③ 谷

#### ●「谷氣通於脾」谷空虚、脾受納故。

(注訳：谷は空っぽで、脾の食べ物を受納する働きと合う。) ——『素問』陰陽応象大論

『太素』三陰陽および『甲乙』6—7は「谷」を「穀」に作る。多紀元簡『素問識』は「宜從『甲乙』等、而爲水穀之氣」(『甲乙』等に從うのがよく、水穀の気である)という。森立之『素問攷注』はさらに「穀者、草木果菜米、食之總名也」(穀とは草木の実・野菜・米など食べ物の総称である)とする。

穀も谷も屋韻見母の同音で、漢・陸賈『新語』慎微に「求神仙、棄二親、損骨肉、絶五谷、廢詩書、背天地之寶、求不死之道」は著者が通仮を用いて書き表し、『老子』6章「谷神不死」河上公注「人能養神則不死、神謂五藏之神也」は注釈者が通仮の「穀」字の養の意味を用いて訓詁している例である。逆に『漢書』王莽伝「穀風迅疾」は「谷風」(東風)のことである。

#### ④ 保

##### ●「藏靈蘭之室、以傳保焉」秘之至也。

(注訳：経典を秘蔵することこの上ない。) ——『素問』靈蘭秘典論

喜多村直寛(1804~76)は『素問笥記』(1851年成)で「保・寶、古字通用」とし、また于鬯(1854~1901)も『香草統校書』で「保讀爲寶」とする。于鬯はさらに脈要精微論の「是故持脉有道、虚靜爲保」(王冰注：然持脉之道、必虚其心、靜其志、乃保定盈虚而不失)も「保」は「宝」で、王冰注の「保定盈虚」は「亦昧(通仮の知識に乏しい)」という。もう一つ、「宝命全形論」の「宝」は「保」の意味であるとも。

「保」「宝」ともに皓韻幫母で同音。上記日中両者が引く『史記』周本紀「九鼎保玉」や漢・李氏鏡銘「明如日月之保」の「保」はいずれも「宝」の意味の通用例である。

#### ⑤ 徇蒙招尤

##### ●「徇蒙招尤、目冥耳聾、下實上虚、在足少陽・厥陰、甚則入肝」徇、疾也。蒙、不明也。言目暴疾而不明。招、謂掉也。搖掉不定也。尤、甚也。目疾不明、首掉尤甚、謂暴病也。

(注訳：「徇」とは疾いことである。「蒙」とは明でないことである。目が急に見えなくなったことをいう。「招」は揺り動くことである。揺り動いて定まらないこという。「尤」は甚だしいことである。目が急に見え、首が揺れ動いて甚だしい、暴病をいうのである。) ——『素問』五藏生成

「徇」について張志聡(1610~74?)は『素問集注』(1669)で「徇・徇同、徇・眩、

古字通」とする。「蒙」は楊上善注では「徇蒙、謂眩冒也」とあり、「冒」に通じるとする。「招」は森立之は『漢書』礼楽志・顔師古注「招搖、申動之貌」を引いて「顛」に通じるとする。「尤眴」は森立之は『説文』「頰、顛也」を引いて、頰の古字とする。

「徇」は邪母（歯頭濁音）、「眴」は書母（舌齒清音）でともに稊韻の近音。「蒙」は東韻（平声）、「冒」は号韻（去声）でともに明母の近音、どちらも「かぶせる」の意味がある。「招」と「顛」はどちらも章母の双声。「尤」と「頰」は同音。

『漢語大詞典』には「徇蒙」の項があり、王冰注を挙げたうえで、「徇、通“眴”」としている。

## ⑥ 宗

- 「陽明者、五藏六府之海、主閏宗筋。宗筋主束骨、而利機關也」宗筋謂陰髮中、橫骨上下之豎筋也。上絡胸腹、下貫臍尻、又經於背腹、上頭項、故云宗筋。

（注訳：「宗筋」は陰毛中の横骨の上下のたての筋をいう。上は胸・腹をまとい、下は腰殿部をつらぬき、また背や腹から頭・項に上っているので「宗筋」という。）——『素問』痿論

『素問』厥論の「前陰者、宗筋之所聚、太陰陽明之所合也」にも王冰は「宗筋、俠齊下合於陰器」（「宗筋」は臍を挟み下って性器で合わさる）と注記しており、腹筋群と白糸を意味する特定の名称と解釈しているようだ。

于鬯（前出）は『広雅』積詁「宗、衆也」より「宗筋」は「衆筋」であるとする。そして『甲乙』巻7・陰衰発熱厥陽衰発寒厥第3に「厥陰者、衆筋之所聚、太陰陽明之所合」とあるのが「尤爲明據」（もっとも明らかな根拠である）とする。

王念孫『広雅疏証』をみると、『周易』同人「同人于宗」（人に同じうするに宗においてす）、『楚辞』招魂「室家遂宗」の諸注「宗、衆也」を挙げ、『爾雅』積宮の「（道）八達謂之崇期」の『文選』引く孫炎注（逸文）「崇、多也」を引いて「崇與宗、亦聲近義同」とする。

痿論の「入房太甚、宗筋弛縱、發爲筋痿」や「陽明虚則宗筋縱、帶脈不引、故足痿不用也」の「宗筋」も「衆筋」で意味が通るのではないだろうか。多紀元簡も『素問識』で「不可即謂宗筋爲前陰也」としている。

「宗」は精母・冬韻（平声）、「衆」は章母・送韻（去声）、精母は舌先前音（歯頭）章母は舌面音（舌上）で発音部位は近く、どちらも無気音（全清）、「崇」は舌葉音の有声音（全濁）で東母。3字とも異なる発音のようであるが、上古音では「衆・崇」ともに東

部、そして冬部と東部は段玉裁が同じ「第九部」にする通韻であった。つまり、3字は疊韻ということになる。

## ⑦ 復

### ● 「十一月十二月、冰復、地氣合、人氣在腎」陽氣深復、故氣在腎也。

(注訳：陽気が深く復ってしまうので、そこで気は腎にある。) —— 『素問』診要經終論

孫詒讓は『礼記』月令「季冬、冰方盛、水澤腹堅」の鄭玄注「腹、厚也」を引いて「復通腹」としている。『呂氏春秋』上農「民農則其産復」畢沅注に「『御覽』復、作厚」とあり、『太平御覽』では「復」を厚としている。『説文』に「腹、厚也」とあり、段玉裁は「腹厚疊韻、此與髮拔也、尾微也一例」としている。これは上古音で腹は屋部 [ok]、厚は候部 [o] に属し、対転関係にあるということを指す。

「復通腹」というのは、「復」は全濁、「腹」は全清で声母が異なるが、いずれも双唇音で近く、さらに疊韻であることをいうもの。

## 3. 『素問』新校正注の反省 —— 通仮の認識

「重校補注黄帝内経素問序」(以下「補注素問序」とする)の末尾には「國士博士(臣)高保衡 光祿卿直秘閣(臣)林億等謹上」と記される。さらに王冰序のあとには「朝奉郎守國士博士同校正醫書上騎都尉賜緋魚袋 高保衡」などいずれも長い列銜をつらねた高保衡・孫奇・林億ら3人の「奉勅校正」と「重改誤」の孫兆の名がある。『重校補注黄帝内経素問』の底本とされたのは王冰次序本であるが、その「補注」の部分にはそれぞれ「新校正云」と記されるので、これを「新校正注」ともいう。

しかし鄭樵(1104~1162)『通志』芸文略には「補注素問二十四卷、林億補注」とし、また王応麟(1223~1296)『玉海』には「黄帝素問、唐竇應初王冰注之、皇朝林億等校正」とする。また時代は下るが「四庫全書総目提要」には「宋林億等校正」、多紀元胤『医籍攷』も「林氏(億)素問補注(今本題云重廣補注)」としており、「新校正」の中心人物は林億であると考えられている。

林億の登場は「校正医書局」の設立と同時であった。宋・仁宗(在位1023~1063)の

嘉祐2年（1057）のことで、後の魏国公・韓琦（1008～75）の奏上を受けて、編修院のなかに置かれた校正医書局の最初の仕事は『嘉祐補注本草』（1060年刊）と『図経本草』（1061年成）の編集出版であり、その責任者は光祿卿直秘閣という地位にある掌禹錫という人物で、林億は「尚書祠部郎中秘閣校理」であった。同僚には、『嘉祐補注本草』の付録として、天下の郡県から献上された物産をもとに『図経本草』を編纂する太常博士・蘇頌がいた。『嘉祐補注本草』序にはほかに張洞の名があり、『図経本草』序には光祿寺丞・高保衡、医官・秦宗古、同・朱有章らの名がある。『嘉祐補注本草』と『図経本草』は合わせて『大観本草』（1108年）として生まれ変わり、原刊本は残らない。

続いて序に「治平二年二月四日」（1065）の日付をもつ『傷寒論』が世に出されたのは仁宗を継いだ英宗の代であった。林億の肩書きは「尚書司封郎中秘閣校理」、末尾の長い列銜では「朝奉郎守尚書司封郎中充秘閣校理判登聞檢院護軍賜緋魚袋」という。さらに「治平三年正月十八日」（1066）の日付のある『金匱玉函経』、同年とされる（馬繼興『中医文献学』）『千金方』、および『金匱要略方論』まで高保衡・孫奇・林億ら3人の肩書きはほとんど変わらない。ただ高保衡・孫奇の肩書きからこの時期までに刊行されたに違いない『千金翼方』で林億の肩書きが「太常少卿充秘閣校理」となっているのはよくわからない。

小曾戸洋『中国医学古典と日本』では『素問』新校正本の刊行を英宗に継いで即位した神宗の熙寧元年（1068）とする。同年刊行とされる（馬氏前出書）『脈経』、また翌年刊行とされる『甲乙』『外台秘要』でも3人の肩書きは『素問』と変わらない。林億の列銜は「朝散大夫守光祿卿直秘閣判登聞檢院上護軍」である。

「補注素問序」によれば林億等が『素問』校正出版の勅命を受けたのは早くも仁宗の嘉祐年間のこと、「聖祖（宋の大祖）の遺事（『開宝本草』の出版など）の将に地に墜ちんとすることを念い、迺ち其の学に通知する者に詔してこれを是正せしむ」といわれてから10年を費やし、「繆誤を正す者六千余字、注義を増す者二千余条」という。

錢氏によれば新校正では通仮のほか以下に訓詁方法を用いている。

1) 因文定義：上下文によって詞義を確定する。

●「邪客於足少陰之絡、令人噓痛、不可肉食、無故善怒、氣上走贛上」王冰注：

「賁」、謂氣奔也。

新校正云：詳王注以「賁上」爲「氣奔」者非。按『難經』「胃爲賁門」（四十四難）楊玄操云「賁、膈也」。是氣上走膈上也。經既云「氣上走」、安得更以「賁」爲奔上之解邪。

（注訳：詳しくは王氷注が「賁上」を「氣奔」としているのは正しくない。考えるに『難經』の「胃は賁門たり」で楊玄操は「奔、膈なり」とする。つまり気が上って膈上を走るのである。経文にすでに「氣上って走る」とあるのに、どうして「賁」を「奔って上る」と解釈できようか。）

——『素問』繆刺論

## 2) 語法の認識

王氷注にも語法の認識は見られていたが、新校正注ではさらに語法現象の分析による説明が詳しくなっている。

### ●「高粱之變、足生大丁」

新校正云：按「丁」生之處、不常於「足」、蓋謂「膏粱之變、饒生大丁」。非偏著「足」也。

（注訳：「丁」が「生」じる部位は、常に「足」であるわけではなく、思うに「膏粱（肥厚の食）による病変は多くの大丁（疔）を生じる」という意味ではないか。「足」に偏ってできるわけではない。） ——『素問』生氣通天論

「足」が名詞ではなく、したがって主語ではないことを、「處」「於」などの語を用いて巧みに説明し、「饒」（おびただしく）という程度副詞の同義に用いられていることを指摘している。

### ●「西方者金玉之城（…）其民陵居而多風」王氷注：居室如陵、故曰「陵居」。

新校正云：詳大抵西方地高、民居高陵、故多風也、不必室如陵矣。

（注訳：詳しくはおおよそ西方は高地であり、住民は高い丘に住んでいるので風が多いので、必ずしも住居が丘のようであるわけではない。） ——『素問』異法方宜論

「陵居」を「陵の如き居室」とする王氷注に対して「高い陵に居住する」意味であると指摘する。これは「陵」が「居」（居住する）という動詞を修飾する状語であり、「居」が居室を意味する名詞ではないという語法現象を説明しているのである。

このほか新校正注は『甲乙』『太素』・全元起本やさらに『脈経』『外台秘要』による

校勘を行い、『説文』『玉篇』などの字書を用いて考証し、銭氏によれば楊玄操『素問積音』などの逸亡資料を用いた形跡もあるという（『中医古籍訓詁研究』154頁）。

新校正注では直接的に通仮字を指摘するものと、『素問』の他の通仮字例を指摘して校勘的観点から通仮字を指摘する2つの方法が用いられる。

直接的指摘 一比較的少ない

① 央

● 「味過於辛、筋脈沮弛、精神乃央」

新校正云：按此論味過所傷、難作精神長久之解。「央」乃「殃」也、古文通用（…）蓋古文簡略、字多假借用也。

（注訳：思うにここでは味（食性）の偏向が害毒となることを論じるので、（王冰注のような）精神長久之解釈はできない。「央」は「殃」のことで、古代の文字では通じて用いた。（…）思うに古代の文字は単純で、字は多く仮借して用いられたのである。）

——『素問』生氣通天論

「央」と「殃」は影母・陽部の同音通仮で、「通用」するが、さらに「古文簡略」というのは「古今字」関係の指摘である。「知」は「知る」と「知恵」の両義で「古文通用」（古字）したが、のちに「知恵」の意味では「智」（今字）が作られた。「赴」にも「駆けつける」と「服喪」の両義があったが、のちに後者の意味では「訃」が今字となった。

校勘的指摘 一ほとんど大部分

② 募

● 「由邪氣内薄於五藏、横連募原也」王冰注：募原、謂鬲募之原系。

新校正云：按全元起本「募」作「膜」。『太素』、巢元方並同。舉痛論亦作「膜原」。

（注訳：思うに全元起本では「募」は「膜」に作る。『太素』および巢元方（『諸病源候論』）でも同じである。『素問』舉痛論でもまた「膜原」に作る。） ——『素問』瘧論

参考

● 「取手太陽經絡者、胃之募也」王冰注：取中腕穴、即胃之募也

新校正云：按『甲乙經』云「取太陽經絡血者則已」、無「胃之募也」等字。

(注訳：思うに『甲乙経』には「太陽経の絡血を取る者は已む」とあるが、「胃之募」などの字はない。) ——『素問』通評虚实論

「募」「膜」ともに『説文』に「莫声」とする。「莫」は上古音が明母・鐸部 [muak]、「膜」は同音、「募」は明母・魚部 [mua] で入・陰対転の通韻関係にあった。

### ③ 徳

- 「是以人有徳也、則氣和於目、有亡、憂知於色」王冰注：徳者、道之用、人之生也。『老子』曰「道生之、徳畜之」、氣者生之主、神之舎也。天布徳、地化氣、故人因之以生也。…

新校正云：按『太素』「徳」作「得」。

(注訳：思うに『太素』では「徳」を「得」に作る。) ——『素問』解精微論

『老子』49章「善者吾善之、不善者吾亦善之、徳善。信者吾信之、不信者吾亦信之、徳信」敦煌本は「徳を「得」に作る。『韓非子』解老第20「徳者内也、得者外也」。

『荀子』解蔽「徳道之人」、王念孫『読書雑誌』荀子7「徳道、即得道也」参照。「徳・得」の上古音は端母・職部の同音で「古文通用」したことがわかる。

### ④ 仆

- 「請問龜愚仆漏之間」王冰注：言不智狡見、頓問多也。漏、脱漏也、謂經有所未解者也…仆、猶頓也、猶不漸也。

新校正云：按全元起本「仆」作「朴」。

(注訳：思うに全元起本では「仆」は「朴」に作る。) ——『素問』解精微論

「仆」「朴」ともに滂母・屋部の同音、「漏」も陋と同音で、「仆漏」は「朴陋」の通仮であろう。

### ⑤ 疑

- 「上通神農、著至教、疑於二皇」王冰注：(雷) 公欲其經法明著、通於神農、使後世見之、疑是二皇並行之教。

新校正云：按全元起本及『太素』「疑」作「擬」。

(注訳：思うに全元起本と『太素』では「疑」は「擬」に作る。) ——『素問』著至教論  
黄帝の雷公に対する「子は医の道を知るか」という問に対する雷公の答えである。二

皇は神農と合わせて「三皇」といわれた「庖犧」と「女媧」のことも易を創始した伏羲と神農のことともいう。

「疑」「擬」ともに疑母・之部の同音、「擬」は比較するの意味になる。

## 第2節——古医籍における通仮

前節で見た「卒一焯」、「央一殃」、「里一理」、「谷一穀」、「保一宝」、「徳一得」、「仆一朴」、「漏一陋」、「疑一擬」などは古音が同音であったために通用された「同音通仮」の例であり、「佩一反」、「能一耐」、「如一而」、「都一瀦」、「居一倨」、「宗一衆」、「復一腹」、「募一膜」、などは古音が近音（双声・疊韻など）であったために通用された「近音通仮」の例である。

このように同音または近音であるために通用された借用字（央、佩など）を「通仮字」といい、本来その意味であった字（殃、反など）を「本字」という。通仮字の字形・字音を借用して本字の意味すなわち「本義」を表していることを見破ることを「破假借而讀以本字」（仮借を破りて、読むに本字を以てす）という。

「不知假借者、不可與讀古書」（仮借を知らざる者は、<sup>とも</sup>与に古書を読む可からず）、また「不明古音、不足以識假借」（古音を明らめざれば、以て仮借を識るに足らず）とは清朝考証学者・朱駿声（注1）の語である。これは考証学によって古音が明らかとなり、始めて仮借が知られるようになったいきさつをよく物語っている。

また考証学の大家である段玉裁（注2）はこう述べている。

知何者爲本義、乃知何者爲假借。則本義乃假借之權衡也。故『説文』『爾雅』（注3）相爲表裏。治『説文』而後『爾雅』及傳注明。『説文』『爾雅』及傳注（注4）明、而後謂之「通小學（注5）」、而後可通經之大義。

（訳：何が本義であるかを知れば、何が仮借であるかも知られる。つまり本義こそが仮借の判断基準なのである。もとより『説文』と『爾雅』はたがいに表裏をなしている。『説文』を研究すれば『爾雅』や伝注も明らかとなる。『説文』『爾雅』と伝注が明らかになって始めて「小学に通じている」

と言えるのであり、こうして始めて五経の大義に通じることができるのである。)

注1) 文字学に精通し『説文通訓定声』を著す(1788~1858)

注2) 後漢の許慎(30? ~124?)がまとめた部首別の字書『説文解字』の体系的研究『説文解字注』を著した(1735~1815)。

注3) 前漢の成立とされる類別編集の字書。

注4) 前漢武帝の時(前136)に易・書・詩・礼・春秋の五経が定められ、その古注に易の象・象二伝等の十翼、毛詩訓詁伝、春秋三伝があり、後漢の鄭玄の三礼注などと合わせてこれを「伝注」という。

注5) 文字・音韻・訓詁の学。

ここに述べられているのは、『説文』の研究によって通仮の問題を明らかにして、始めてそれ以前の字書や古注が読めるようになるのであり、それから始めて古典の文意に通じることができるという、「通仮」の重要性にほかならない。

医学の世界で儒教古典の「五経」に相当するもの(注6)に、『素問』『靈枢』の諸篇や『神農本草経』、張仲景書などがあり、『素問』鍼解篇や『靈枢』小鍼解篇などは『靈枢』九鍼十二原篇の古注であるから「伝」に相当する。また『太素』楊上善注や『素問』王冰注、『素問』新校正注などは諸家注に相当するというわけである。

段玉裁等いわゆる清朝考証学者たちは『説文』などの研究成果によって通仮の問題を明らかにし、これを五経解釈の方法として体系的に応用し、考証学の精華といえる諸研究を著した。

前節で紹介した俞曲園『讀書余録』(素問48条)、胡石生『素問校義』、于鬯『香草統校書』(素問2卷)、また王念孫『素問合韻譜』や孫詒讓の業績などは最先端の考証学者たちが古医籍の研究にその研究方法の応用を試みた例として評価するべきであるが、残念ながら古医籍を体系的に網羅した研究と言えるものではなかった。

注6) 「五経の説を詳かにして衆病を癒す」(『平家物語』医師問答の事)

考証学的な研究方法を古医籍研究の分野で体系的に応用したのは、日本の江戸医学館を本拠とした研究者たちであった。

明和2年(1765)、幕府医官・多紀元孝は神田佐久間町の天文台跡地に私塾「躋壽館」を設立し、「御医師の子弟 並びに陪臣医師 町医師 惣じて医道に志すの輩」に「医道の講釈」をする許可を願い出て容れられた。

元孝はその翌年72才で没し、嫡嗣の元恵がその経営を相続した躋壽館は1500余坪の

土地に講堂、学舎（寄宿舎）、游息軒（学習室）、食堂、薬園などを備えたが、明和9年（1772）、火災に類焼した。

元恵は翌安永2年（1773）、私財を以て再建したが、禄高200俵の多紀氏は経済的負担に耐えかねて幕府に援助を願い出、これに対して老中・田沼意次から大目付に通達が出されて、江戸中の医師から毎年銀1.2匁が醸出されることになった。こうして躋壽館では考証医学の創始者といわれる目黒道琢、儒者の太田錦城などがそれぞれ医書や儒書を講じて、広範な古典の読解力が培われていったのである。

天明6年（1786）、田沼意次は失脚し、老中となった松平定信は側近に世評情報『よしの冊子』を書かせ、改革政治の判断材料とするが、この中で官医関連記事は200条に上る。それは主に官医の人柄・臨床手腕・学識（読書力）に関する情報であった。

寛政元年（1789）、松平定信は官医の組織改革を断行する通達を出す。そして寛政3年（1791）、彼らの医業研鑽のための機関として躋壽館を「医学館」として官営化することを決定する。

惣じて医職の分は至って重き事に付き、精々厚く鍛練これ有りたき儀に候。然りながら、流儀・見識等一同にはこれ無き事に候間、入学の外、出席の面々はただ聞見を広め、治療の相談等致し候訳に付き、心得違ひこれ無く、彼我を存せず、相互に学業治術研究いたし其の道精熟候様、心得らる可く候。——『憲教類典』所収の幕府通達

ところで先の『よしの冊子』に「書物を読むを御尋ねならば、安長・玄徳の外江戸にはなし」と書かれた安長は元恵の嫡嗣で、医学館官営化の当初から講師であった多紀元簡（1755～1810）の通称である。寛政11年（1799）、父元恵が致仕を許されると、家督と医学館督事を相続した。

一方、日本では知識階級の多くの医家は幕府医官・藩医といった身分にあった。これらの医家は基本的には世襲の者で、地位も比較的高かったのである。井上金峨・吉田篁墩・狩谷掖斎と進展し確立していった日本の考証学は、これらの師から直接、あるいは山本北山・太田錦城といった儒者を介して、多紀元簡・元胤・元堅（注7）、伊沢蘭軒・柏軒・棠軒（注8）、小島宝素・春沂（注9）、渋江抽斎（注10）、喜多村直寛（注11）、

森立之・約之（注12）、堀川舟庵（注13）、山田業広（注14）など、江戸医学館を取り巻く医家達に受継がれた。彼らは幕府権力の背景という有利さも手伝って、文献資料の蒐集という点でも恵まれていた。——小曾戸洋『中国医学古典と日本一書誌と伝承』、塙書房

注7) 多紀元簡の主著は『脈学輯要』（1795年自序）、『傷寒論輯義』（1801年自序）、『金匱要略輯義』（1806年稿）、『素問識』（1806年自序）、『靈枢識』（1808年自識語）、『扁鵲倉公列伝彙攷』（1810年稿）など。嫡嗣・元胤（1789～1827）は文化3年（1806）、医学館督事となり『難経疏証』（1819年成）、『医籍考』80巻などを著す。その弟の元堅（1795～1857）は別に一家を興したが医学館の重鎮で、医学館で嘉永2年（1849）に『千金方』、また安政6年（1859）に『医心方』を校刊したとき中心となった。主著は『傷寒広要』（1825年成）、『傷寒論述義』（1827自序）、『薬治通義』（1836年自序）、『金匱要略述義』（1842年自序）、『診病奇佞』（1843年成）、『素問紹識』（1846年自序）など

注8) 伊沢蘭軒（1777～1829）は福山藩医で門下に渋江抽斎・森立之・山田業広などの逸材を育成した。柏軒はその次男、棠軒（1834～75）は長男・榛軒の養嗣子で『素問釈義』を著す。

注9) 小島宝素（1797～1848）は幕府医官の家系で書物の鑑識・校勘に長け、蔵書目録に『宝素堂蔵医籍目録』があり、嫡嗣・春沂（1829～57）も書誌学に通じ『医籍著録』を著す。

注10) 弘前藩医で医学館講師、森立之・堀川舟庵・小島春沂らと『経籍訪古誌』（1856年成）を著し、また『靈枢講義』（1844年稿）を著すなどの業績を残すが『医心方』校刊中にコレラで倒れた（1805～58）

注11) 幕府医官の子で医学館の重職にあったが辞職、『傷寒論疏義』（1844年自序）、『金匱要略疏義』（1849年自序）を著す（1804～76）。

注12) 森立之（1807～85）は御菌意斎の秘術を伝授された医家森氏の七世、森氏は三世より江戸に出、父の代から福山藩医となる。嘉永7年（1854）より医学館講師、『本草経攷注』（1857年成）、『素問攷注』（1864年成）、『傷寒論攷注』（1868年成）などを著す。嫡嗣・約之（1835～71）は父の著作に書き込みを残すほか『傷寒論余聞』（1863年稿）などを著す。

注13) 医学館講師、『経籍訪古誌』の共著者でまた『傷寒論』趙開美本影印（1856年刊）を世に出し、『扁鵲倉公伝考異』などを著す（？～1857）。

注14) 高崎藩医で蘭軒門下、『傷寒論札記』（1850年稿）、『金匱要略札記』（同）、『金匱要略集注』（1863年自序）、『素問次注集疏』（1870年稿）、『九折堂読書記』（1872～75年成）などを著す（1808～81）。

ここで「文献資料の蒐集」といわれているのは、京都仁和字本『太素』の発見、米沢上杉家秘蔵の現存最古の宋改『千金方』と半井家秘蔵本『医心方』の校刊などのことである。医学館官営計画を進めていた松平定信は寛政2年（1790）、京都に『医心方』探索を命じ、仁和寺本の残欠本を発見、さらに完全本を秘蔵する典薬頭半井家が嘉永7年（1854）になってようやく『医心方』を提出した。

こうして花開いた医学館をめぐる研究者達の業績の中でも森立之の攷注の連作には目を見張るものがある。その研究の根底を支えているのは段玉裁の著作から学んだ古音の知識と、通仮字の識別能力であった。

『素問』上古天真論の「今五藏皆衰、筋骨解墮、天癸盡矣」の「解墮」について、森立之は『素問攷注』で「案、解墮字、『説文』作“懈惰”、此作“解墮”者、古文通用。必竟、義在音而不在字也」とする。銭超塵は「素問攷注解説」（1998）で、「森氏が提示した“義在音而不在字”は、まさに訓詁の核心である。彼は古音の知識を用いて『素問』中の多くの仮借字を解釈した」という。

## 1. 同音通仮

### ① 皆一偕

●暑當與汗皆出 ——『素問』熱論

●不能與衛氣俱行、不得皆出 ——『素問』癰論

この「皆」の本字は「偕」である。癰論で「俱行」と対偶をなし、また『諸病源候論』の引用では「與汗偕出」となっているのが証拠としてよいという（銭『訓詁』37頁（注1））。

「皆一偕」の通用例は古代に多く、『詩経』周頌・豊年「降福孔皆」（福を降すこと孔は<sup>はな</sup>だ皆<sup>あま</sup>ねし）の「皆」を『晋書』などで「偕」に作る。また『書経』商書・湯誓「有衆率<sup>あ</sup>怠、弗協、曰“時日曷喪、予及汝皆亡”」（有衆は率<sup>たみくさ</sup>い怠<sup>あわ</sup>りて協<sup>あ</sup>さず、曰く「時の日<sup>こ</sup> 曷<sup>いつ</sup>か喪<sup>は</sup>びん、予も汝と皆に亡びん（注2）」と）の「皆」を『孟子』梁惠王上の引用では「偕」に作る。『管子』大匡「與夫人皆行」郭沫若集校に引く李哲明「皆、讀爲偕、古字通用」参照。

注1) 文中、銭超塵『中医古籍訓詁研究』を『訓詁』と、『内経語言研究』を『語言』と、『黄帝内経太素研究』を『太素』と略す、以下同。

注2) 夏王・桀が人民を脅かすためにいった言葉を、人民が裏返しに取り上げて桀が亡びるのを願望む意味で唱和したという。

## ② 湊一腠

### ●此湊理開閉之常 ——『素問』五常政大論

この「湊」は「清靜則肉腠閉拒」（清静なるときは肉腠閉拒す——『素問』生氣通天論）の「腠」が本字である。同様の通用例に漢・桓寬『塩鉄論』大論「扁鵲攻湊理、絶邪氣、故癰疽不得形成」（扁鵲は湊理を攻め、邪気を絶し、故に癰疽 形成することを得ず）などがある。『儀礼』郷飲酒礼の「肺皆離、皆右體進腠」（肺皆離れ、皆体を右にして腠を進む）の鄭玄注「腠、理也、進、謂前其本也」、同・公食大夫礼「載體進奏」（体を載せて奏を進む）の鄭玄注「奏、謂皮膚之理也」によれば「奏」もまた「腠」の通假字である。さらに『爾雅』積獸「奏」の郝璞注「皮理腠蹙」について郝懿行『爾雅義疏』は「『釈文』本或作“湊”…是腠與湊同」（『釈文』本或いは“湊”に作る。…是れ腠は湊と同じ）とする。錢氏は「すなわち“腠”という字もまた“湊”の仮借だったのである」という（『訓詁』39頁）。「奏」はイノシシのことで皮理腠蹙はその体毛が密生して短い。

## ③ 薄一迫

### ●「血苑於上、使人薄厥」 ——『素問』生氣通天論

張介賓注：相迫曰“薄”、氣逆曰“厥”。

（相迫するを“薄”という、氣の逆するを“厥”と曰う。）

張志聰注：薄、迫也。氣血并逆、而使人迫厥也

（薄は迫なり。氣血あわせて逆し、人をして迫厥せしむなり。）

森立之『攷注』：氣血奔并迫于心肝、則發狂證。

（氣血奔って心肝に迫る、則ち發狂の証なり。）

いずれも「薄」を「迫」の意味に解釈していることで一致している。

「曹共公聞其駢脅、欲觀其裸、浴、薄而觀之。」

（曹の共公 其の駢脇なるを聞き、其の裸を觀んと欲し、浴するや、薄して之を觀る。）

杜預注：薄、迫也。 ——『左伝』僖公23年

薄、迫也。 ——『小爾雅』廣言2

『周易』説卦伝3章「雷風相薄」、同5章「陰陽相薄」いずれも岩波文庫（高田・後藤訳）で「相い<sup>ホ</sup>薄る」とする。これらは「薄」が「迫」の通仮である徴証としてよい。

『素問』同篇の「寒薄爲皸（寒薄れば皸を為す）」、「形乃困薄（形乃ち困薄す）」、「脈流薄疾（脈流の薄疾し）」も上文と同じ用法である。『靈樞』癰疽の「天宿失度、日月薄蝕（天宿の度を失えば、日月は薄蝕す）」の「薄蝕」も『呂氏春秋』明理（注に「薄、迫也」）や『史記』天官書に見える。錢氏は生氣通天論「愈氣化薄」も同例とする（『訓詁』38頁）。

**愈氣亦陽氣、而出于愈穴者也。化者、施化之化、言寒氣中身、若愈氣之化薄乏。**

（愈氣はまた陽氣にして、愈穴より出ずる者なり。化は施化の化にして、寒氣身に中り、若し愈氣の化薄乏なれば…。） —— 森立之『素問攷注』

「愈氣の化薄ければ」と訓んでいることがわかる。

また、「薄」は「搏（拍）」の通仮ともなる場合がある。

**『素女』曰、十動効、一曰、兩手抱人者、欲體相薄、陰相當也。**

（『素女（経）』に曰く、十動の効は、一に曰く、両手に人を抱く者は、体の相い薄し、陰の相い当らんことを欲すなりと。） —— 『医心方』卷28

**又云、凡初交會之時、…男箕坐抱女於懷中、於是勒纖腰、撫玉體…二形相搏。**

（また『洞玄子』に）云わく、凡そ初めて交會せん時、…男は箕坐して女を懷中に抱く。是に於いて纖腰を勒し、玉体を撫で、二形相い搏すと。） —— 『医心方』卷28

前者の「相薄」は后者の「相搏」と同じ状態の表現であることがわかる。

**夫雷者、陰陽薄觸之爲耳。**

（夫れ雷とは、陰陽の薄觸して為せるのみ） —— 『封氏聞見記』（唐・封演）

『素問』通評虛実論の「偏閉塞不通、内氣暴薄也（偏して閉塞し通ぜざれば、内氣暴薄すなり）」、また厥論の「酒氣與穀氣相薄（酒氣と穀氣相薄す）」などはこれと同じ用法である。

## 2. 近音通仮

### [1] 双声通仮

#### ① 在一察

##### ● 「容色見上下左右、各在其要」 ——『素問』玉版論要篇

在、察也。所謂色變者、面容之色、見於上下左右。當各察其淺深逆順之要。

(在は察なり。所謂色変とは、面容の色の上下左右に見わる。当に各々其の浅深逆順を察すべし。) ——高士宗注

簡按、在、察也。見『爾雅』釋詁。

(簡按ずるに、在は察なり。『爾雅』釈詁に見ゆ。) ——多紀元簡『識』

『書』堯典『正義』引“舍人”曰“在見物之察”、『詩』“在帝左右”、『禮』文王世子“必在視寒暖之節”、逸『周書』大聚篇“王親在之”、箋注竝云“在、察也。”在・察一聲之轉存者。

(『尚書』堯典『尚書』正義』引く“舍人”に曰く“物の察たるを在見す”と。

『詩(経)』(大雅文王)に“帝の左右を在す”、『礼(記)』文王世子に“必ず寒暖の節を在視す”、逸『周書』大聚篇に“王親しく之を在す”、『詩経』鄭玄]箋・『礼記』注並びに“在は察なり”という。在・察は一声の転存する者なり。)

——郝懿行『爾雅義疏』

「在」は舌尖前有声音 [dz]、[察]は舌葉有気音 [tʃ] で同じ「齒音」に属して双声である。

#### ② 報一赴(疾)

##### ● 「(肺)虚則少氣、不能報息」 ——『素問』藏氣法時論

古文多假“報”爲“赴”、取其疾速之義。

(古文に多く“報”を仮りて“赴”と爲し、其の疾速の義を取る。) ——錢氏『訓詁』40頁

毋拔來、毋報往。(拔として来ること母れ、報として往くこと母れ) ——『礼記』少儀

報讀爲赴疾之赴。拔・赴、皆疾也。人來往所之、常有宿漸、不可卒也。

(報は読みて赴疾の赴と為す。拔・赴、皆<sup>とも</sup>に疾なり。人来往して之<sup>ゆ</sup>く所、常<sup>まさ</sup>に宿漸有るべく、卒<sup>にわ</sup>かにする可からず。) —— 『礼記』少儀・鄭玄注

**報謂赴也。拔・赴、皆疾速之意、凡人所之、適必有宿漸、毋得疾來、毋得疾往。**

(報は赴の謂なり。拔・赴は皆に疾速の意にして、凡そ人の之く所、適に必ず宿漸有るべく、疾かに來たるを得ること母く、疾かに往くを得ること母れ) —— 『礼記』少儀・孔穎達疏

**報葬者報虞。三月而后卒哭。**

(報として葬る者は報として虞せ。三月にして后、哭を卒えよ。) —— 『礼記』喪服小記

**報讀爲赴疾之赴。謂不及期而葬也。既葬即虞。虞、安神也。**

(報は読みて赴疾の赴と為す。期に及ばずして葬るを謂うなり。既に葬りて即ちに虞す。虞は神を安んずるなり。) —— 『礼記』喪服小記・鄭玄注

**此一節論不得依常葬之禮也。赴、猶急疾也。急葬謂貧者、或因事故死而即葬、不得待三月也。急虞謂亦葬竟而急設虞謂<sup>ママ</sup>安神、故宜急也。**

(此の一節は常葬の礼に依ることを得ざるを論ずるなり。赴は猶お急疾のごとし。急に葬るは貧者、或いは事故に因って死して即ちに葬り、三月を待つことを得ざるを謂うなり。急に虞すは葬り竟って急に虞を設け神を安んずるを謂うなり。) —— 『礼記』喪服小記・孔穎達疏

「報」は双唇無気音 [p]、「赴」は同有気音 [p'] で唇音に属し、双声である。

### ③ 臨一隆

● 「太陰之人、其状…臨臨然長大」 —— 『靈樞』通天

臨者、大也。『靈樞經』通天篇云“太陰之人、其状臨臨然長大”。臨之言、隆也。

『説文』“隆、豐大也”。臨與隆、古亦同聲。(卷1上「臨、大也」)

(臨は大なり。『靈樞經』通天篇に云う“太陰の人、其の状臨臨然として長大なり”と。臨の言は隆なり。『説文』に“隆は豊大なり”と。臨は隆と古に亦た声を同じくす。) —— 王念孫『広雅疏証』

ここで王念孫がいう「同聲」はまた双声の別の言い方にほかならない。「臨」も「隆」も舌尖中辺音 [l] で両者は双声なのである。

### ④ 中一当

● 「桂枝不中與也」 —— 『傷寒論』太陽上16条

不中、不當也。(不中は不当なり。) —— 『傷寒論条弁』方有執注

按、即“不當與”。(按ずるに、即ち“与うるに当たらず”。) ——錢氏『訓詁』40頁

『管子』(輕重甲)“楚有黄金、中齊有菑石也”。中、當也。言楚有黄金、當齊有菑石也。

(『管子』(輕重甲)に“楚に黄金有るは、齊に菑石有るに中る”と。言うところは楚に黄金有るは齊に菑石有るに当たるなり。) ——王念孫『讀書雜誌』

『傷寒論』太陽中68条「本渴飲水而嘔者、柴胡湯不中與」も同例。「中」も「当」もまったく同じ舌尖中無気音 [t] で双声である。

## ⑤ 無一亡

- 「太陽病、發熱惡寒、熱多寒少、脈微弱者、此無陽也」——『傷寒論』太陽上27条  
“無陽”者、即亡陽也。(中廿八)“亡津液”、『玉函』作“無津液”、可以徵也。  
亡陽者、謂胃陽之氣乏少也。

(“無陽”とは即ち亡陽なり。[中廿八]“亡津液”を『玉函』に“無津液”に作るは、以て徴とす可きなり。亡陽とは胃陽の気の乏少するなり。) ——森立之『攷注』

亡とは出て行くことで、多くが出て残り少なくなるのが「亡血」、「亡津液」の意味である。「無血」「無津液」と書かれてもそれは「亡血」「亡津液」の通仮であり、「まったく無い」という意味ではない。

「無」と「亡」はともに双唇鼻音 [m] で双声である。

## ⑥ 比一眇(粒)

- 菑川王美人懷子、而不乳。來召臣意。…旋乳。臣意復診其脈、而脈躁。躁者有餘病。即飲以消石一齊、出血。血如豆比、五六枚

(菑川王の美人[妃の稱]子を懷みて乳<sup>う</sup>まず。来たりて臣意を召す。…旋<sup>よう</sup>やく乳む。臣意復た其の脈を診るに、脈躁なり。躁は余病有り。即ち飲むに消石一齊を以てすれば血を出す。血は豆比の如く、五六枚なり。) ——『史記』扁鵲倉公列伝

吾在益州、與數人同坐、初晴明、見地上小光。問左右“此是何物”。有一蜀豎就見、荅云“是豆逼耳”。相顧愕然、不知所謂。命取將來、乃小豆也。窮訪蜀土、呼粒爲“逼”、時莫之解。吾云“『三蒼』『説文』、此字白下爲七、皆訓粒、『通俗文』音方力反”。衆皆歡悟。

(吾益州に在りて、数人と同坐し、初めて清明にして地上に小光を見る。左右に問えり“此れは是れ何物か”と。一蜀豎有りて就きて見、答えて曰く“是れは豆逼なり”と。相顧みて愕然と謂う所を知らず。命じて取りて将来するに、乃ち小豆なり。蜀土を窮訪せしに粒を呼んで“逼”と為す。時に之莫く解す。吾云く『三蒼』『説文』に此の字、白の下に匕を為し、皆に粒と訓ず、『通俗文』に音方力の反”と。衆皆歡悟せり。) ——顔之推『顔氏家訓』勉学第8

由于“比”・“逼”與“皂”雙聲、故可以“比”或“逼”代本字“皂”。

(“比”・“逼”は“皂”と双声なるに由て、故に以て“比”或いは“逼”は本字“皂”に代わつて可なり。) ——錢氏『訓詁』41頁

## [2] 豊韻通仮

### ① 渾一滾

#### ● 「渾渾革至如涌泉」 ——『素問』脈要精微論

按『甲乙經』及『脈經』作“渾渾革革至如涌泉”。

(按ずるに『甲乙經』及び『脈經』は“渾渾革革として至ること涌泉の如し”に作る。) ——新校正『文選』七發注“渾渾、波相隨貌”。

(『文選』七發注に“渾渾は、波の相い隨う貌なり”と。) ——多紀元簡『識』

『禮記』檀弓下…注“革、急也”。…案“渾渾革革”者、其脈涌起有進無退之貌。…『荀子』富國篇“財貨渾渾如泉源”、注“渾渾、水流貌”。

(『礼記』檀弓下…注に“革は急なり”と。…案ずるに“渾渾革革”とは其の脈涌起するに進むこと有りて退くこと無きの貌なり。…『荀子』富國篇“財貨渾渾として水流の如し”、注に“渾渾は水流の貌なり”と。) ——森立之『攷注』

“渾渾”形容脈來洪大、其字本爲“滾”。“滾”與“渾”古韻均在文部。…故下文乃云“至如涌泉”。

(“渾渾”は脈來たること洪大なるを形容し、其の字本“滾”為り。“滾”と“渾”は古韻均しく文部に在り。…故に下文に乃ち云う“至ること涌泉の如し”と。) ——錢氏『訓詁』

「渾」は舌根有声擦音 [y]、意味は本来は混濁であるが舌根無氣塞音 [k] の「滾」と同じ文部 [ən] の豊韻であり、「渾渾」は「滾滾」(水が沸き立つように盛んに流れる様)の通仮である。

## ② 虫—疼

### ●「凡痺之類、逢寒則蟲、逢熱則疼」——『素問』痺論

案、“蟲”與痛・疼同音。疼字、『説文』作〔疰、動病（『一切經音義』引作“動痛”）也。从疒、蟲省聲〕。…『素問』作“蟲”、蓋“疰”之古字、“疰”當从蟲、作“虫”者、是篆文之略體也。今作“蟲”者、猶“癩”之作“辟”。…『千金』“疼”作“冬”〔7—17ヲ〕亦與此同例、偶存古字者也。

（案ずるに“蟲”は痛・疼と同音なり。疼字を『説文』に作る〔疰は動病なり〔『一切經音義』に引いて“動痛”に作る〕。疒に従い、蟲の省声なり〕。…『素問』に“蟲”に作るは蓋し“疰”の古字にして、“疰”は当に蟲に従うべく、“虫”に作るは是れ篆文の略体なり。今“蟲”に作るは猶お“癩”を“辟”に作るごとし。…『千金』に“疼”を“冬”に作るも亦た此れと同例にして、偶々古字を存する者なり。）——森立之『攷注』

古音“蟲”在冬韻定紐、“疼”在冬韻端紐、嚴格地説、“蟲”・“疼”字是疊韻字。所謂“逢寒則蟲”、意爲“逢寒則疼”。

（古音は“蟲”は冬韻定紐に在り、“疼”は冬韻端紐に在り（注1）、嚴格に説けば、“蟲”・“疼”字は是れ疊韻字なり。所謂る“寒に逢えば則ち蟲す”とは、意は“寒に逢えば則ち疼す”為り。）——錢氏『訓詁』

注1) 定紐は [d]、端紐は [t]、冬部は [uŋ]。

## ③ 耆—嗜

### ●「默默耆臥」——『足臂十一脈灸經』足少陰脈

### 「多溺耆臥」——『足臂十一脈灸經』足厥陰脈

段玉裁云“經傳多假耆爲之”。按“耆”古音在脂韻群紐、“嗜”在脂韻禪紐、韻部相同、故相假借。

（段玉裁云く“經伝多く耆を仮りて之を爲す）と。按ずるに“耆”は古音脂韻群紐に在り、“嗜”は脂韻禪紐に在り、韻部相同じ、故に相假借す。）——錢氏『訓詁』

この例では馬繼興『馬王堆古医書考釈』も「耆假爲嗜」と認めている。

錢氏の段玉裁の引用は『説文注』2上口部・嗜より。8上老部・耆でも「古多假借爲嗜字」とする。經伝の例では、『礼記』月令「節耆欲、定心氣」。『孟子』告子上「口之於味也、有同耆也」。『荀子』非十二子篇「無廉恥、耆飲食」、注「耆與嗜同」。『漢書』于定国伝「少時耆酒、多過失」。「脂韻」すなわち脂部は [—i] 韻尾の陰声で、

群紐は舌根有声塞音 [g]、禪紐は舌面前有声擦音 [z] である。

ただ、例えば『礼記』月令注に「[耆] 市志反」としている。これは『漢語大詞典』でも『集韻』「時利切」を引いて禪母の音を別けるように、嗜の古字は嗜音で読まれたと  
する考えを示すものである。

#### ④ 堅—腎

- 「癩、以奎蠹蓋其堅、即取桃枝東向者、以爲弧…射以三矢」

——『五十二病方』143条

按、“堅”乃“腎”之假借字。謂納男性之陰（又稱外腎）于大蠹瓠之中。古音“堅”・  
“腎”均從“𣦵”聲、而聲紐不同。“堅”在真韻見紐、“腎”在真韻禪紐。由于  
韻部相同、故可通假。

（按ずるに“堅”は乃ち“腎”の仮借字なり。男性の陰〔又た外腎と稱す〕を大なる蠹瓠の中に  
納る。古音“堅”・“腎”は均しく“𣦵”<sup>しか</sup>声に従い、而も声紐は同じからず。“堅”は真韻見紐に  
在り、“腎”は真韻禪紐に在り。韻部の相同じきに由て、故に通仮す可し。）——錢氏『訓詁』

「真韻」すなわち真部は鼻音韻尾 [n] の陽声 [en] で、見紐は舌根無気塞音 [k]、  
禪紐は舌面前有声擦音 [z] である。ちなみに馬繼興『馬王堆古医書考釈』では「原  
訛」としている。

### [3] 非双声・非疊韻の類音通仮

双声ではないが声母が近いもの、または疊韻ではないが韻部が近いものは互いに通  
仮され、これも音近（類音）による通仮にふくまれる。

#### ① 州・周一竅

- 「天地之間、六合之内、其氣九州、九竅、五藏、十二節、皆通乎天氣」

——『素問』生氣通天論

今按、“九竅”二字、實爲衍文。“九州”即九竅也。『爾雅』釋獸篇“白州驪”、  
郭注曰“州、竅。”北山經“倫山有獸、如麋、其川在尾上”、郭注曰“川、竅也”。  
川即州字之誤。是古謂竅爲州。此云“九州”、不必更言“九竅”、“九竅”二字、  
疑即古注之誤入正文者。

(今按ずるに、“九竅”二字は、実は衍文為り。“九州”は即ち九竅なり。『爾雅』積獸篇〔正しくは積畜馬属〕“白州は驪なり”、郭注〔東晋・郭璞〕に“州は竅なり”と曰う。[[『山海經』] 北山經“倫山に獸有り、麋の如く、其の川は尾上に在り”、郭注に“川は竅なり”と曰う。川は即ち州字の誤りなり。是れは古に竅を謂いて州と為す。此れに“九州”と云わば、必ずしも更に“九竅”と言わず、“九竅”の二字は、疑うらくは即ち古注の正文に誤入せる者ならんかと。)

——俞曲園『讀書余録』1・内經素問48条一其7

“九州”是原來經文所有、“九竅”是後人對“九州”的旁注、由于輾轉傳抄、旁注竄入正文、其誤已在王冰以前。古音“州”在幽韻章紐、“竅”在藥韻溪紐、雖然既非雙聲又非疊韻、但是古韻幽部與藥部的主要元音相近、幽韻屬陰聲、藥韻屬入聲、又屬於陰入對轉、所以“州”字可以代替“竅”字。

(“九州”は是れ原来の經文に有る所にして、“九竅”は是れ後人の“九州”に対するの旁注なるが、輾轉と伝抄せるに由て、旁注の正文に竄入せるもの、其の誤りは已に王冰以前に在り。古音“州”は幽韻章紐に在り、“竅”は藥韻溪紐に在り、既に双声に非ず又た疊韻に非ず然りと雖も、但だ是れ古韻の幽部は藥部と主要元音の相近く、幽韻は陰声に属し、藥韻は入声に属し、又た陰入對轉に属す、所以に“州”字は以て“竅”字に代替するも可なり。) ——錢氏『訓詁』  
『廣雅』曰“州・豚、臀也”。郭注『爾雅』『山海經』皆云“州、竅也”。按、州・豚、同字。

(『広雅』に曰く“州・豚<sup>タク</sup>、臀なり”)と。郭注『爾雅』『山海經』皆に“州は竅なり”と云う。按ずるに、州・豚は同字なり。) ——段玉裁『説文注』10上馬部・驪

“臄・尻・州・豚、臀也”。…『爾雅』釋畜・馬“白州、驪”、北山經“倫山有獸焉、…其州在尾上”、郭注竝云“州、竅也”。内則“鼈去醜”、鄭注云“醜、謂鼈竅也”。醜與州聲近義同、豚與州聲亦相近。『玉篇』“豚、尻也”。『廣韻』云“尾下竅也”。『楚語』“日月會于龍虺”。

(“臄・尻・州・豚、臀なり”。…『爾雅』積畜・馬“白州は驪なり”、北山經“倫山に獸有り、…其州は尾上に在り”、郭注竝びに“州は竅なり”と云う。『礼記』内則“鼈〔シナスッポン〕は<sup>+</sup>醜を去つ”、鄭注に“醜は鼈竅を謂う”と云う。醜と州とは声近く義同じ、豚と州とも声亦た相近し。『玉篇』“豚は尻なり”。『広韻』[入一・屋]に“尾下の竅なり”と云う。『楚語』に“日月は龍虺に会す”と。[[『広韻』入4・覺に「豕、龍尾。豚、同上」]])

——王念孫『広雅疏証』卷6下・積親

●人州出、不可入者、以膏、膏出者。

(人の州出て、入る可らざる者、膏を以て出る者に膏ぬる。) ——『五十二病方』160条  
153条～161条は牝痔方、馬繼興も「州出」は脱肛のこととする。

●二日、疏股、動陰、縮州。

(二に曰く、股を疏し、陰を動じ、州を縮む。) ——『十問』32条

縮州、即進行収縮肛門的運動。

(縮州とは、肛門を収縮する運動を進行するなり) ——馬繼興

●旦起、起坐、直脊、開尻、翕州。

<sup>あした</sup>  
(旦に起き、起坐し、脊を直にし、尻を開き、州を翕す。) ——『天下至道談』9条

每天早晨、起床後開始正坐、伸直脊背、弛緩臀部、収縮肛門。

(每天早晨に、起床後正坐を開始し、脊背を伸直し、臀部を弛緩し、肛門を収縮す。)

——馬繼興

●垂尻、直脊、翕周。 ——『天下至道談』9条

州與周、上古音均章母、幽部韻。同音通假。…臀部懸空下垂、伸直脊背、収縮肛門。

(州と周とは上古音は均しく章母、幽部韻。同音通仮す。…臀部を懸空下垂し、脊背を伸直し、肛門を収縮す。) ——馬繼興

「竅」は無韻尾 [—o] 宵部 (段玉裁第2部)、「州・周」は錢・馬両氏の指摘通り無韻尾 [—u] 幽部 (段玉裁第3部) でいずれも陰声、『老子』41章「下士聞道、大笑之」の「道」(幽部)と「笑」(宵部)の例のように旁転により通韻される。

② 隋一脍

●「若美鹽、盈隋、又以塗隋□下及其上」 ——『五十二病方』103条

同源字、禪・邪隣紐、微・歌旁轉、脍即臀部。…精制的食鹽、滿滿地放在臀部、又塗在臀部

(同源の字、[脍は] 禪・[隋は] 邪の隣紐、[脍は] 微・[隋は] 歌の旁轉、脍は即ち臀部なり。…精制的食鹽を滿滿地に臀部に在りて放ち、又た臀部に在りて塗る。) ——馬繼興

『説文』肉部“隋、裂肉也”。…『説文』“脍、臀也”。小許<sub>ママ</sub>本『説文繫傳』

“脛、尻也”。『太素』経脈病解楊上善引『説文』云“脛、尻也”。段玉裁注：“尻乃近穢處、今北方俗云溝子是也”。按、析言之則“脛”爲“尻”、統言之則“脛”訓“臀”。『五十二病方』之“脛（隋）”當指尻。

（『説文』肉部“隋、裂肉なり）。…『説文』：“脛、臀なり”。小徐本『説文繫傳』：“脛、尻なり”。『太素』経脈病解に楊上善『説文』を引きて云う：“脛、尻なり”。段玉裁注：“尻は乃ち穢處に近し、今の北方の俗に云く溝子はれなり”。按ずるに之を析言すれば則ち“脛”は“尻”爲り、之を統言すれば則ち“脛”を“臀”と訓ず。『五十二病方』の“脛〔隋〕”は当に尻を指すべし。）——錢氏『訓詁』

脛の禅母は舌面前有声擦音 [z]、隋の邪母は舌尖前有声擦音 [z]、また脛の微部 [əi] と隋の歌部 [ai] はともに韻尾 [-i] の陰声、旁転の関係にある。

以上の1・2項を通じてみたように、古漢語中の通仮現象はきわめて普遍的なものである。しかしこれを見分けるための基準があり、段玉裁の言葉を借りるならば、「古假借必同部」（古假借は必ず部を同じくす）、「假借多疊韻或雙聲」（仮借に疊韻或いは双声多し）とあるように、韻部と声紐の解析が欠かせないのである。

## 付、「古今字」および「約定俗成」について

「古音通仮という訓詁方法を研究し運用するに当たって、あと2つの問題に言及しなければならぬ。すなわちまず後出字（区別字ともいう）の問題で、後出字は仮借字と混同してはならないものである。さらに通仮字のいわゆる約定俗成の問題がある」

（錢氏『訓詁』46頁）。

### 1) 古今字のこと

ここで錢氏が「後出字」というのは羅邦柱主編『古漢語知識辞典』（武漢大学出版社、1988）の「古今字」の項で、意味が区分される前の原字（古字）に対して偏旁を増加・改変して意味を限定した今字（区別字ともいう）のことであろう。別称の「区別字」は共通している。

例えば「知」は「知る」と「智恵」の意味を兼ねていたが、後に「知」字を基礎として「日」を加え「智」として「智恵」の意味を表すこととした。また「赴」は「赴」と「服喪」の意味を兼ねていたが、後に部首を「言」に変えて「訃」とし、「服喪」の意味を表すものとした。「知」と「智」、「赴」と「訃」がつまり古今字である。

（『古漢語知識辞典』25頁）

錢氏『訓詁』は『素問』『靈樞』などに見られる古今字は、（偏旁増加字としては）「寫一瀉」「欲一慾」（があり、偏旁改変字としては）「張一脹」「連一輦」があるとする46～48頁。

### 寫一瀉

- 補寫勿失 —— 『素問』脈要精微論
- 補寫之時 —— 『靈樞』九針十二原など。
- 寫、置物也（寫は物を置く） —— 『説文』

謂去此注彼也…按、凡傾吐曰瀉…俗作瀉者、寫之俗字

（此を去りて彼に注ぐを謂うなり。…按ずるに凡そ傾吐するを瀉と曰う。…俗に瀉に作るは瀉の俗字なり。） —— 段玉裁注

- 既見君子、我心瀉兮（既に君子を見て我心瀉す） —— 『詩經』小雅・蓼蕭

輸瀉其心也。箋云…我心瀉者、舒其情意、無留恨也

（其の心を輸瀉すなり。箋に云う…“我が心瀉す”とは其の情意を舒し、恨みを留むること無きなり） —— 毛伝

### 欲一慾

- 嗜欲不能勞其目 —— 『素問』上古天真論
- 欲、食也（欲は食る） —— 『説文』

古有欲字、無慾字。後人分別之、製慾字、殊乖古義

（古に欲字有りて慾字無し。後人之を分別し慾字を製するは殊に古義に乖れり。） —— 段玉裁注

### 張一脹

- 煩勞則（筋）張精絶 —— 『素問』生氣通天論
- 一日腹脹 —— 『説文』病部

“張”、汲古閣<sup>(注1)</sup>作“脹”誤、今依宋本訂。古無脹字。『左傳』“晉侯…張、如廁”、即今之脹字也

(“張”)を汲古閣“脹”に作るは誤りなり、今 宋本に依りて訂す。古は脹字無し。『左傳』“晉侯…張すれば廁に如く”、即ち今の脹字なり。) ——段玉裁注

『素問』『靈樞』又有“氣脹”・“府脹”<sup>(注2)</sup>諸語、皆作“脹”。於是有謂“脹”爲本字而“張”爲借字者、其實適成顛倒

(『素問』『靈樞』に又た“氣脹”・“府脹”の諸語、皆に“脹”に作る事有り。是に於て“脹”は本字爲り、“張”は借字爲りと謂える事有るは、其の實適たま顛倒を成す。) ——錢氏『訓詁』  
「今之脹」とはいうものの今字(後出字)を認めていない段玉裁の執拗な追跡は、古今字を明らかにするときとても役に立つ。錢氏は「通仮」の概念だけを応用して「張」は「脹」の通仮字と考えては本末転倒になる、つまり古今字を逆さに理解すると指摘する。

注1) 明末の蔵書家・毛晋の収集を経た本。

注2) 『素問』脈要精微論「上盛則氣膈依全元起本訂、下盛則氣脹」、『靈樞』脹論「六府脹」など参照。

## 連一輦

●因於寒、欲如連今本作連樞 ——全元起本『素問』生氣通天論

此“連”字與“輦”爲古今字、“連”之後出字爲“輦”、謂人若感風寒、當如車輦之樞、外動而内靜…段玉裁『周禮漢讀考』云：“案、連輦古今字”

(此の「連」字は「輦」と古今字爲り、「連」の後出字「輦」爲り、人の若し風寒に感じては當に車輦の樞の如く、外動にして内静なるべきを謂う…段玉裁『周禮漢讀考』に云う「案ずるに連輦は古今字ならん」と。) ——錢氏『訓詁』

今本の「連樞」を錢氏は新校正注記による全元起本の「連輦」と訂することで、段玉裁の連輦古今字説を応用できるテキストにしている。

## 2) 約定俗成のこと

同音・近音であればどんな字でも通仮字にされるかといえば、そうではなく、ある字の通仮字はある時代にはこう書かれ、ある書ではこう書かれるという一定の決まりがあり、それを錢氏は「約定俗成」であるという。

「蚤」は『説文』で「齧人蟲也（人を齧む虫なり）」とされ、ノミのことであるが、早いという意味の「早」字の通仮字とされた。

#### ●四之日其蚤、獻羔祭韭

（四の日 其の蚤、羔を獻じ韭を祭る） ——『詩經』七月

#### 蚤、借爲早。古代稱月初爲月朝、月早即月朝

（蚤は借りて早と爲す。古代には月初を稱して月朝と爲す、月早は即ち月朝なり。） ——高亨注

#### 經傳多假爲早字

（經傳に多く仮りて早字と爲す。） ——『説文』段玉裁注

早の同音字（幽部・精母）には棗や藻もあるのだが、通仮字とされるのは決まって蚤であること、これを約定俗成というのである。

「脾」は『説文』に「土藏也」とあり、いうまでもなく五臓の一つの名であるが、段玉裁注に「按、古文以脾爲髀字（按ずるに古文に脾を以て髀字と爲す）」とあるように、髀の通仮字とされた。これは『儀礼』士昏礼「髀不升」など鄭玄注「古文髀爲脾」、『詩經』小雅・車攻の毛伝「射左髀」を『釈文』に「脾」に作るなどによるか。

#### ●鴻蒙方將拊脾、雀躍而遊

（鴻蒙は方に將に脾を拊ち、雀躍して遊ぶ。） ——『莊子』在宥篇

馬王堆『足臂十一脈灸經』「脾外廉病」、『陰陽十一脈灸經』「脾不可以運」、『十問』『合陰陽』『天下至道談』「尻脾能壯」なども例証とされる。

## 第3節——古医籍における韻例

南朝齊末『文心雕竜』で、有韻の「文」と無韻の「筆」が意図的に分けられる以前、漢代までは文章に韻がないということは考えられなかったのではないだろうか。

●古人之文、化工也、自然而合于音、則雖無韻之文、而往往有韻。苟其不然、則雖有韻之文、而時亦不用韻、終不以韻害意也

(古人の文は化工なり、自然に音に合するときは、則ち無韻の文と雖も而も往々にして韻有り。苟し然らざるとき、有韻の文と雖も而も時に亦た韻を用いず、終に韻を以て意を害せざるなり。)

——顧炎武『日知録』五經中多有韻之文

用韻の法則を「韻例」という。そもそも音韻に歴史的変化のあることは、『詩経』の用韻の検証から始められた(『毛詩古音考』1601)。清朝考証学者・王念孫(1744~1832)は手稿『合韻譜』に時代別の用韻法の研究成果を記した。その中で『素問』の用韻法は陸賈『新語』と焦延寿『易林』という漢代の2書と4冊にまとめられており、王念孫は『素問』が漢代の用韻法の特徴をもつと考えていたことがわかる。江有誥(1773~1851)は『先秦韻読』(『音楽十書』の一)の中で先秦諸子と『素問』の用韻法を同じようにまとめている。

## 1. 韻位

韻字の句中における位置が「韻位」である。『素問』『靈樞』では韻字が句末に来る「韻脚」と韻字が句末の虚字の前に来る「虚字脚」がある。

### [1] 韻脚

- |                 |                        |
|-----------------|------------------------|
| ①診病不審、是謂失常 (陽)。 | 診病審ならず、是を失常と謂う。        |
| 謹守此治、與經相明 (陽)。  | 謹んで此の治を守れば經とともに明らかならん。 |
| 上經下經、揆度陰陽 (陽)。  | 『上經』『下經』は揆度・陰陽         |
| 奇恆五中、決以明堂 (陽)。  | 奇恆・五中、決するに明堂を以てし       |
| 審於終始、可以橫行 (陽)。  | 終始を審らかにすれば、以て横行すべし。    |

——『素問』疏五過論

先秦韻部では常(開三 [iaŋ])、明(開四 [iaŋ])、陽(開三 [iaŋ])、堂(開一 [aŋ])、行

(開二 [aŋ]) いずれも陽部 [aŋ] に入る。漢代韻部では明 (開三 [ieŋ])、行 (開二 [eŋ]) の2字は耕部 [eŋ] に移行する。

- |               |                   |
|---------------|-------------------|
| ②凡刺寒邪日以温 (真)、 | 凡そ寒邪を刺すは日々以て温め、   |
| 徐往疾去致其神 (真)、  | 徐に往き疾やかに去り其の神を致す、 |
| 門戸已閉氣不分 (文)、  | 門戸已に閉じて気分かれず、     |
| 虚實得調真氣存 (元)。  | 虚実調うることを得て真氣存す。   |

(「疾去」「真氣」は『太素』による) —— 『靈枢』刺節真邪

漢代韻部で温 (開二 [eŋ])、神 (開三 [ieŋ]) はともに真部 [eŋ]、分 (合三 [iueŋ]) は文部 [əŋ] に入り、存 (合三 [iuan]) は元部 [aŋ] に入る。この場合、旁転による押韻であることが考えられよう。

## [2] 虚字脚

- |                  |            |
|------------------|------------|
| ①逆而奪 (月 [at]) 之、 | 逆らいて奪わば    |
| 惡得無虚 (魚 [a])、    | 悪んぞ虚無きを得ん  |
| 追而濟 (脂 [ei]) 之、  | 追うて濟わば     |
| 惡得無實 (質 [et])、   | 悪んぞ実無きを得ん  |
| 迎之隨 (歌 [ai]) 之、  | 之を迎え之に随い   |
| 以意和 (歌 [ai]) 之、  | 意を以て和せば    |
| 鍼道畢 (質 [et]) 矣。  | 鍼道畢れり。     |
| 凡用鍼者 (魚 [a])、    | 凡そ鍼を用いる者は  |
| 虚則實 (質 [et]) 之、  | 虚すれば則ち実し   |
| 滿則泄 (月 [at]) 之、  | 満つれば則ち泄し   |
| 宛陳則除 (魚 [a]) 之、  | 宛陳なれば則ち除き  |
| 邪勝則虚 (魚 [a]) 之。  | 邪勝つときは則ち虚す |

これは先秦韻部でこそ月部 [at] と歌部 [ai] が陰入対転、歌部 [ai] と脂部 [ei]・魚部 [a]、また月部 [at] と質部 [et] がそれぞれ近旁転で押韻することができる例である。

- |                   |             |
|-------------------|-------------|
| 寫日必持内 (微 [ai]) 之、 | 写に日く必ず持して内れ |
|-------------------|-------------|

放而出（物 [ət]）之。

放ちて出す。

ここは陰入対転。

補曰隨之隨之、

補に曰く随いて随い

意若妄（陽 [aŋ]）之、

妄なるが若し

若行若按、

行らす若く按ずる若く

如蚊虻（陽 [aŋ]）止。

虻の如くせん。——『靈枢』九針十二原

「止」は決意を表す助詞。

②夫癰疽之生（耕 [eŋ]）、

夫れ癰疽の生じ

膿血之成（耕 [eŋ]）也、

膿血の成れるや

不從天下（魚部 [a]）、

従り下らず

不從地出（物 [ət]）、

地従り出ず

積微之所生（耕 [eŋ]）也。

積微の生じる所なり。

故聖人自治于未有形（耕 [eŋ]）也、

故に聖人は未だ形有らざるを治し、

愚者遇其已成（耕 [eŋ]）也。

愚者は其の已に成れるに遇なり。——『靈枢』玉版

耕 [eŋ] と魚部 [a] は正対転の旁、物 [ət] とは陽入の近旁対転。

③時世異（之 [ə]）耶、

時世異なるか

人將失之（之 [ə]）耶。

人將た之を失うか。——『素問』上古天真論

## 2. 韻式

用韻の方式・規則が「韻式」である。『素問』『靈枢』には次の4種の韻式が用いられていると考えられる。

**隔句韻例：**首句に押韻せず、第2句から1句おきに押韻するもの。『詩経』に用いられた韻式で、後世の韻文でも最も多く見られ、『素問』『靈枢』も例外ではない。

(OAOA式)

**隔第三韻例：**首句・第2句と続けて押韻し、第3句を飛ばしてまた第四句で押韻するもの。

『詩経』にも多く見られ、『素問』『靈枢』にも用例は多い。

(AAOA式)

連句韻例：2句ないし3句・4句と連続して押韻するもの。

(AA式、AAA式、AAAA式など)

交錯韻例：両韻が交錯してあらわれるもの。(AABB式、ABBA式など)

## [1] 隔句韻例

- ①上視天光、下司八正（耕）  
以辟奇邪、而觀百姓（耕）  
審於虚實、無犯其邪（魚）  
是得天之露、遇歲之虚（魚）
- 上は天光を視、下は八正を司<sup>うかが</sup>い、  
以て奇邪を辟け、百姓に觀<sup>しめ</sup>す。  
虚実を審らかにし、其の邪に犯さること無きも、  
是に天の露を得て、歳の虚に遇う。

——『靈枢』官能

第2句「正」と第4句「姓」は耕部 [eŋ]、第6句「邪」と第8句「虚」は魚部 [a] で、それぞれ韻位が韻脚の隔句韻例。

- ②虚與實隣、知決而通（東）之  
左右不調、把而行（陽）之  
明於逆順、乃知可治（之）  
陰陽不奇、故知起時（之）
- 虚実と隣せば、知決して通じ、  
左右調わざれば、把みて行らす。  
逆順を明らめば、乃ち治す可きを知り、  
陰陽は奇ならず、故に起くる時を知る。

——『靈枢』官能

第2句「通」は東部 [oŋ]、第4句「行」は陽部 [aŋ] であるが、主要元音が隣合い、韻尾が共通な近旁転の関係から押韻され、韻位が虚字脚の隔句韻例。第6句「治」と第8句「時」は之部 [ə] で、韻位は韻脚の隔句韻例である。

- ③大熱在上、推而下（魚）之  
從下上者、引而去（魚）之  
視前痛者、常先取（候）之  
大寒在外、留而補（魚）之  
入于中者、從合寫（魚）之
- 大熱上に在れば、推して下し、  
下従り上る者は、引きて去れ。  
前に痛む者を視れば、常に先に取れ。  
大寒外に在れば、留めて補い、  
中に入る者は、合従り写せ。——『靈枢』官能

第2句「下」と第4句「去」は魚部 [a]、第6句「取」は候部 [ɔ]、第8句「補」と第10句「写」は魚部で、主要元音が隣合い、いずれも無韻尾の近旁転で、韻位が虚字脚の隔句韻例である。

- ④**麤守形、上守神** (真) 麤は形を守り、上は神を守る。  
**神乎、神客在門** (文) 神なるかな、神客 門に在り、  
**未睹其疾、惡知其原** (元) 未だ其の疾を睹ざれば、悪くんぞ其の原を知らん。  
 ——『靈枢』九鍼十二原

第2句「神」は真部 [en]、第4句「門」は文部 [ən]、第6句「原」は元部 [an] いずれも同じ [-n] 韻尾で主要元音の隣合う近旁転で押韻され、脚韻の隔句韻例。第3句を「神乎神」で断句すると隔句韻例にならなくなってしまう。

- ⑤**知機之道者、不可掛以髮** (月) 機の道を知る者は、掛くるに髮を以てす可からず(注1)。  
**不知機道、叩之不發** (月) 機道を知らざれば之を叩くも発せず。  
 ——『靈枢』九鍼十二原

第2句「髮」と第4句「発」が同じ月部 [at] の脚韻、隔句韻例。

注1) 第2句の「髮」は「泛指極小之量」(『漢語大詞典』12巻733頁)の意味で「間不容髮」の髮、弓の名人は少しの力も入れずに弩機の引き金を動かし、逆に下手なものは力任せに叩いても発射することができない。「引かぬ弓放さぬ矢にて射るときは中らずしかもはずさざりけり」(『鍼道秘訣集』)、また『莊子』養生主篇の庖丁が「神を以て遇し目を以て視ず、官知止みて神欲行わる」ゆえに19年間刃こぼれ一つせずに牛刀を使っているという挿話にも通じよう。

- ⑥**隨之隨之、意若妄** (陽) 之 之に随い之に随う、意は妄なる若く  
 zīwai ʃia zīwai ʃia, iə ɲiak mīwan ʃia,  
**若行若按、如蚊虻** (陽) 止 行る若く按ずる若く、蚊虻の如し。  
 ɲiak yeŋ ɲiak an, ɲia mīwan meŋ ʃiə. ——『靈枢』九鍼十二原

この4句を発音記号で表してみたが、第2句「妄」と第4句「虻」が同じ陽部 [aŋ] の虚字脚・隔句韻例であることがよくわかる。

## [2] 隔第三韻例

①言陰與陽（陽）、合于五行（陽） 陰と陽を言わば、五行に合す。

五藏六府、亦有所藏（陽） 五藏六府も、亦た蔵する所有り。

——『太素』知官能

第1句の「陰與陽」は『靈枢』官能では「陰與五」に作る。『太素』によれば第1句「陽」、第2句「行」、第4句「蔵」がともに陽部 [aŋ] の脚韻、隔第3句韻例である。

②刺之微（微）、在速遲（脂） 刺の微は 速遲に在り

羸守關、上守機（微） 羸は關を守り（注1）、上は機を守る（注2）

第1句の「微」と第4句「機」は微部 [əi]、第2句「遲」は脂部 [ei]、微部と脂部は主要元音が [ə] と [e] で隣合い、韻尾がともに [i] で近旁転の脚韻、隔第3句韻例である。

注1)「守」には「守候」つまり「待つ」の意味もある。筆者が『素問』『靈枢』への兵書の影響

（『日本経絡学会誌』22巻3号、1996）で「関は彎」と書いた関はワン [oan] と読む。『左伝』注などに「関は弓を引く」とある。いま、と言う時に弓を引くより、すでに弩の弦に矢をつがえ、「機」の指を引けばいつでも発射できる状態で待機している方がよほど要領がよいことはいうまでもなく、ここでその点を補足しておく。

注2)「機」は弩機ともいい、横にした弩弓の中央の木臂という矢を装着する台の矢尻側の端にある発射装置。狩猟時代の原始的な骨製のものから改良され、戦闘に使用され始めた戦国時代には銅製となり、漢代には青銅製の銅郭という箱に収められ、照準機に当たる望山を見てねらいを定め、弦を掛ける銅牙を懸刀という引き金を引いて動かした。

③蓋其外門（文）、眞氣乃存（文） 蓋し其の外門 眞氣乃ち存す

kat gĩə ŋuat muən, ʃien khiəi nə dzuən

用鍼之要、無忘其神（真） 用鍼の要は 其の神を忘る無れ

ʌiwoŋ ʃiəm ʃia ʎau, miwa miwaŋ gĩə dʃien ——『靈枢』官能

この4句も発音記号で表した。第1句「門」と第2句「存」が文部 [əŋ]、第4句「神」が真部 [en]、韻尾がともに [n] で近旁転の脚韻、隔第3句韻例である。また第2句「真」と第4句「神」も響き合い、「無忘」[miwa miwaŋ]も同音反復を利かせている。同音

反復とは隔句韻例⑥の「若妄」([ŋiək mīwəŋ])と「如蚊虻」([ŋiə mīwan meəŋ])のように同じ音韻が反復されることをいう。

④審其陰陽（陽）、以別其柔剛（陽） 其の陰陽を審らかにし、以て  
eiəm giə iəm liəŋ, liə biət giə ŋiə kaŋ

陽病治陰、陰病治陽（陽） 其の柔剛を別ち、陽病は陰を治し、陰病は陽を治す  
liəŋ biəŋ diə iəm, iəm biəŋ diə liəŋ — 『素問』陰陽応象大論

第1句「陽」、第2句「剛」、第4句「陽」がいずれも陽部 [aŋ] の脚韻、隔第3韻例である。この例では発音表記でもわかるように脚韻のひびきだけではなく、第3句と第4句が陰 [iəm] と陽 [iaŋ] を入れ替えるだけの強い同音反復の音韻構造となっていることが注目される。その要となるのは陽部の「病 [biəŋ]」字の存在により織り成される句中韻（『老子』などに見られる）にはかならない。

⑤別而未能明（陽）、 別ちて未だ能く明らめず、  
biət ŋiə mīwəi naŋ miəŋ,

明而未能彰（陽） 明らめて未だ能く彰ならざるは  
miəŋ ŋiə mīwəi naŋ ŋiəŋ

足以治群僚、 群僚を治するに足るも、  
tsiəwək liə diə giəwən liəu,

不足治侯王（陽） 侯王を治するに足らず。  
piəwa tsiəwək diə ŋə ŋiəwəŋ — 『素問』著至教論

第1句「明」、第2句「彰」、第4句「王」がいずれも陽部 [aŋ] の脚韻、隔第3韻例である。而未能明、明而未能 [ŋiə mīwəi naŋ miəŋ, miəŋ ŋiə mīwəi naŋ] の同音反復は連珠という上文の結語を下文が取り込む修辭（明、明而）をきわだたせているといえる。

⑥脈動無常（陽）、散陰頻陽（陽） 脈動常無し、陰を散じて頻る陽  
mek doŋ mīwa ziəŋ, san iəm phuai liəŋ

脈脱不具、診無常行（陽） 脈脱して具せず、診に常行無し  
mek thuat piəwa giəwə, ŋien mīwa ziəŋ ŋeəŋ — 『素問』方盛衰論

第1句「常」、第2句「陽」、第4句「行」がいずれも陽部 [aŋ] の脚韻、隔第3韻例

である。第1句と第3句の句首「脈 [mek]」字の反復、第4句の「常行 [ziaŋ yeŋ]」という同韻反復もこの一節の音韻的結合を強めている。

### [3] 連句韻例

#### A A 式

①知其往來（之）、要與之期（之） 其の往來を知りて要らずこれ之と期す。

tīe giə yīwaŋ lə, iəu liə tīa giə — 『靈樞』九鍼十二原

錢氏『語言』に従ったが、以下に続く「麤之聞乎、妙哉工獨有之（之）」を第3、第4句と取れば隔第3韻例となる。錢氏は第4句が虚字脚となるので、虚字韻例を避けたのであろう。第1句「來」字は魏晉南北朝時代から哈部 [vi] に移行する。のちに哈部となる字の大部分は漢代までは之部に属していた（注1）。

注1)「羊牛下來（羊牛下り来る）」と「如之何勿思（如何ぞ思うこと勿らんや）」（『詩經』君子于役）など上古文学における哈部と之部の通韻は音韻変化説の端緒ともなった。陳第『毛詩古音考』は『儀禮』注の「來、讀爲釐（來は読んで釐と為す）」を引き、『周易』『楚辭』『黃庭經』などの押韻例の傍証としている。

②天覆地載（之）、萬物悉備（之） 天覆い地載せ、万物悉く備わる。

thien phiuk diai tsə, miwan miwət siət biə — 『素問』宝命全形論

第1句「載」字もまた魏晉南北朝時代から哈部 [vi] に移行する。

#### A A A 式

③令各有形（耕）、 各々をして形有らしめ、

lieŋ kak yīwə yīeŋ,

先立鍼經（耕）、 先に『鍼經』を立てん、

sian liəp tīəm kieŋ,

願聞其情（耕）。 願わくは其の情を聞かん。

ŋiwan miwən giə dziŋ — 『靈樞』九鍼十二原

第1句は「令」字、「形」字ともに耕部 [eŋ] の首尾韻例、第2句「經」字、第3句「情」字と続く3連句韻例である。

④得其人乃傳（元）、  
tək giə ɲien nə dīwan,

其の人を得て乃ち伝え、

非其人勿言（元）、  
pīwəi giə ɲien mīwət ɲian,

其の人に非ずんば伝うる勿れ

何以知其可傳（元）。  
yai liə tīe giə khai dīwan

何を以て其の伝うる可きかを知らん。

——『靈樞』官能

#### A A A A 式

⑤是以診有大方（陽）、  
zīe liə ɲien ɣīwə dat pīwan,

是れを以て診に大方有り、

坐起有常（陽）、  
dzuai khīə ɣīwə zīan,

坐起に常有り、

出入有行（陽）、  
tshīwət ɲīəp ɣīwə ɣean,

出入に行有り、

以轉神明（陽）。  
liə tīwan dīen mian

以て神明を転ず（注1）。

——『素問』方盛衰論

「是以」は導入詞であるから、以下は各句四言の4連句韻例というきわめて強固な結びつきの音韻構造となっている。

連句韻例にはさらに5句以上の用例もあるが、ここでは省略し、また機会を改めて紹介することにした。

注1) 「大方」は大道に同じ。「常」は常度で日常生活の節度、「行」は品行で進退における品位を保つこと。

#### [4] 交錯韻例

##### A B A B 式（両韻互協例）

聖人之治病（陽）也、  
ēien ɲien tīa dīə bīan liai,

聖人の病を治するや

必知天地陰陽（陽）、  
pīet tīe thien dīai iam lian,

必ず天地の陰陽、

①四時經紀（之A） 四時の経（綱？）紀、  
sīei zīə kieŋ kiə,

五藏六府（侯B） 五藏六府、  
ŋa dzaŋ liuk pīwə,

雌雄<sup>（注1）</sup>表裏（之A） 雌雄・表裏と  
tsīe yīwəŋ pīau liə,

刺灸砭石 刺灸・砭石  
tsīe kiwə pīam zīak

毒藥所主（侯B） 毒薬の主る所とを知る。  
duk liəuk jīa tīwə  
——『素問』疏五過論

第1句は虚字脚で「病 [bīaŋ]」字と第2句「陽 [liəŋ]」字がともに陽 [aŋ] 部でAA式連句韻例である。第3句「經紀」は『淮南子』精神訓に「天を以て父と為し、地を以て母と為す。陰陽を綱と為し、四時を紀と為す」とあり、「天地陰陽、四時綱紀」であったことも考えられる<sup>（注2）</sup>。天地 [thien dīai]（舌音）、陰陽 [iəm liəŋ]（喉音）、四時 [sīei zīə]（齒音）、綱紀 [kaŋ kiə]（牙音）という声母の異なる双声合成詞の4連続は確固たる安定感を与えている。

第3句「紀 [kiə]」字、第5句「裏 [liə]」字はともに之 [ə] 部、第4句「府 [pīwə]」字と第6句「主 [tīwə]」字はともに侯 [ə] 部でABAB式交錯韻例である。第5句「雌雄 [tsīe yīwəŋ]」と第6句「刺灸 [tsīe kiwə]」に [ts~y~] と [ts~k~] という声母同型（舌音～牙音～）の合成詞の反復があり、また第4句「府 [pīwə]」、第5句「表 [pīau]」、第6句「砭 [pīam]」の [p] 音の3句連続も特徴的である。

注1) 「律の数六、分ちて雌雄を為す」『淮南子』

注2) 郭霽春主編『黄帝内経素問校注』では「上下文に於て類せず、経絡に作ることを疑う」。

### ABBA式（両韻隔協例）

候吸引鍼（侵） 吸うを<sup>うかが</sup>候いて鍼を引けば  
yə hiəp liən tīəm,

氣不得出（物） 氣出ずることを得ず、  
khīəi pīwə tək ehīwət,

②**各在其處** (魚A) 各々其の処に在りて  
kak dzə gǐə t̪hǐa,

**推闔其門** (文B) 其の門を推闔し、  
thuai ɣap gǐə muən,

**令神氣存** (文B) 神氣をして存し、  
lieŋ d̪ien khǐəi dzuən,

**大氣留止** (之B') 大氣をして留止せしむ、  
dat khǐəi liəu t̪iə,

**故命曰補** (魚A) 故に命じて補と曰う。  
ka miəŋ ɣiwat puə.

——『素問』離合真邪論

第1句「鍼 (t̪iəm)」字は侵 [əm] 部、第2句「出 [chǐwət]」字は物 [ət] 部で陽入対転 (侵 [əm] 部は鼻音韻尾の陽声類、物 [ət] 部は入声韻尾の入声類で主要元音が同じで押韻すること) のAA式連句韻例である。第3句「處 [t̪hǐa]」字と第7句「補 [puə]」字はともに魚 [a] 部で、これらをAとする。第2句「門 [muən]」字、第3句「存 [dzuən]」字はともに文 [ən] 部、また第6句「止 [t̪iə]」字は之 [ə] 部で陰陽対転 (之 [ə] 部が無韻尾の陰声類、文 [ən] 部は鼻音韻尾の陽声類で主要元音が同じで押韻する)、これをB (およびB') とする。第3～第7句を通してみると、本例の韻式はA B B B' A式となる。

また第3句「各在 [kak dzə]」、第5句「神氣 [d̪ien khǐəi]」、第6句「大氣 [dat khǐəi]」に見える同類声母 [k~dz~] (牙音~舌音~) [d̪~kh~] (舌音~牙音) [d~kh] (同) の反復は本例に顕著な音韻的特徴を与えている。

このように数句を隔てて押韻する韻式をA B B A式 (両韻隔句協例) といい、A B A A B B B式、A A B B A B式などの変化型がある。

③**工之用鍼** (侵A) 也 工の鍼を用いるや  
kəŋ t̪ia liəŋ t̪iəm liəi,

**知氣之所在** (之A) 氣の在る所を知り、  
t̪ie khǐəi t̪ia t̪ia dzə,

**而守其門戸** (魚B) 而して其の門戸を守り  
ŋiə ɕiu gǐə muən ɣa,

**明於調氣** (微A) 氣を調うること  
miəŋ iə diu khǐəi,

補寫所在 (之A)

pua sia ʃia dzə,

補写の在る所、

徐疾之意 (之A)

zia dziet ʃia iə

徐疾の意と

所取之處 (魚B)

ʃia tshiwə ʃia ʃhia.

取る所の処を明らかにす。

——『靈枢』官能

この第1句も虚字脚、「鍼 [ʃəm]」字は侵 [əm] 部、第4句「氣 [khīəi]」字は微 [əi] 部とともに第2・5句「在 [dzə]」字、第6句「意 [iə]」字の之 [ə] 部と主要元音が共通の陰陽対転 (之 [ə] 部・微 [əi] 部は陰声類、侵 [əm] 部は陽声類であり、いずれも主要元音が同じで押韻する)。そこで第1・2・4・5・6句をAとする。第3句「戸 [ya]」字と第7句「處 [ʃhia]」字はともに魚 [a] 部である。これをBとする。

第1～第7句を通してみると、本例の韻式はA A B A A A B式となる。

第2句「知氣 [tīe khīəi]」と第4句「調氣 [diu khīəi]」という類音の反復が本例前段に、また第3句「門 [muən]」、第4句「明 [mīan]」、第5句「補 [pua]」という双唇音の反復は中段にアクセントをもたらしている。第2・5句の「所在 [ʃia dzə]」の反復に加えて第6句「徐疾 [zia dziet]」、第7句「所取 [ʃia tshiwə]」という [ʃ~dz~] [z~dz~] [ʃ~tsh~] (舌音~ 歯音~) の同型声母の反復は後段にあきらかな音韻的特徴を与えている。

## 付、句中韻例および句首韻例について

### ①『大要』曰、

dat iəu yīwat,

『大要』に曰く、

「徐而疾 (質) 則實 (質)、

“zia nīə dziet tsək dīet,

「徐にして疾なるときは則ち実し、

疾而徐 (魚) 則虚 (魚)」

dziet nīə zīa tsək hīa.”

疾にして徐なるときは則ち虚す」と。

——『靈枢』九鍼十二原

第1句は書名『大要』を含む引語で、第2・3句が引文であることは、第2句「疾 [dziet]」

字と「實 [d̥iət]」字がともに質 [et] 部、また第3句「徐 [zia] 字」と「虚 [h̥ia]」字がともに魚 [a] 部で押韻していることからわかる。錢氏『語言』はこうした「句中韻例」は『内経』では少ないので一項を立てて説明はしないがここに指摘するという(319頁)。本例のように1句中において押韻する韻例を句中韻例といい、『詩経』や『老子』などの古経に特徴的である。

②『大要』曰、(注1)

dat iau yīwat,

「彼(歌) 春之暖(元)、  
“pīai thiwən ʃia nuan,

爲(歌) 夏之暑(魚)、  
yīwai yea ʃia eīa,

彼(歌) 秋之忿(文)、  
pīai tsiu ʃia phīwən,

爲(歌) 冬之怒(魚)。」  
yīwai tuŋ ʃia na.”

『大要』に曰く、

「彼の春の暖は

夏の暑と為り、

彼の秋の忿は

冬の怒と為る。」

——『素問』至真要大論

第2～5句が引文。第2句「暖 [nuan]」字は元 [an] 部、第4句「忿 [phīwən]」字は文 [ən] 部で元音が近い旁転、第3句「暑 [eīa] 字」と第5句「怒 [na] 字」はともに魚 [a] 部。A B A B 式の交錯韻例。第2・4句「彼」、第3・5句「為」ともに歌 [ai] 部の句首韻例である。

注1)『傷寒論』傷寒例は引語「是以」とする。『素問』脈要精微論に同文。

## 第4節——古医籍における音韻と校勘

### 1. 古韻による校書の方法

清朝考証学は「段王之学」とも呼ばれるが、ここで段玉裁と並び称される王念孫(1744

～1832)の校勘学上の不朽の名著である『読書雑誌』82巻は9種の古典(注1)の本文について疑問の点を抜き出し、文字の謬訛・句読の錯乱・音訓の異同などについて一々考証を加え、正しい本文に改めることで全句を疎通し、正確に原意を反映できるようにしたものである。「一字の証に博く万卷を極め、心を折りて頤を解く、他人百思すれども到ること能わず」(阮元)と評されるほど精緻・綿密をきわめ、武内義雄がその『淮南子』についての校語を高松宮家蔵の小野道風『秋萩歌卷』紙背にあった唐初抄本『淮南子』とくらべると、15条のうち14条までが一致していた(金谷治注2)。

注1)『逸周書』『戦国策』『史記』『漢書』『管子』『晏子春秋』『墨子』『荀子』『淮南子』。

注2)『世界の名著』諸子百家(中央公論社)

王念孫はその校書の方法について「読淮南子雑誌書後」の中でこう述べている。

若し夫れ入韻の字、若し訛脱有れば、或いは経に妄改有れば、則ちその韻遂に亡ぶ。

『淮南子』は散文中に多量の韻文が挿入されており、伝抄を経るにしたがって少なからぬ脱訛を生じている。抄写の際に妄改が加えられ、押韻が失われているのである。王念孫はこうした失韻致誤の状況を18条にまとめて説明している。

- 1 字誤に因りて其の韻を失うこと有る者
- 2 脱字に因りて其の韻を失うこと有る者
- 3 字倒に因りて其の韻を失うこと有る者
- 4 句倒に因りて其の韻を失うこと有る者
- 5 句倒に因りて又た注文を移すこと有る者
- 6 錯簡して其の韻を失うこと有る者
- 7 改字して其の韻を失うこと有る者
- 8 改字して以て合韻し実は韻に非ざること有る者
- 9 改字して以て合韻し反って其の韻を失うこと有る者
- 10 改字して其の韻を失い又た注文を改めること有る者
- 11 改字して其の韻を失い又た注文を刪ること有る者
- 12 加字して其の韻を失うこと有る者
- 13 句読誤り又た加字して以て其の韻を失うこと有る者

- 14 既に誤り且つ脱し其の韻を失うこと有る者
- 15 既に誤り且つ倒じ其の韻を失うこと有る者
- 16 既に誤り且つ改め其の韻を失うこと有る者
- 17 既に誤り又た加字し以て其の韻を失うこと有る者
- 18 既に脱して又た加字し以て其の韻を失うこと有る者

錢氏『語言』はこの王念孫の18条の失韻原因を「誤字・改字（誤文・訛文・訛字・誤改）」、「字倒（倒文・誤倒）」、「字脱（脱文・奪文・脱字）」、「誤句読」、「加字（衍文・増字）」の5つに整理した上で、『内経』を校書する上の次の5原則をまとめている。

- 1 妄改字や写誤字による失韻があれば、古韻により改める。
- 2 字倒による失韻があれば、古韻により改める。
- 3 字脱による失韻があれば、古韻により補正する。
- 4 句読の誤りによる失韻があれば、古韻により句読を正す。
- 5 増字による失韻があれば、古韻により衍文を刪去する。

## 2. 古医籍における失韻例

### [1] 字誤例

字誤例は誤字（誤文・訛文・訛字）や改字（誤改）による失韻である。

- ①1 上古之人、其知道者、上古の人、其の道を知れる者は、  
[zǐwɑŋ ka ʃia niən, gǐə tiē du tʃia, ([a] 魚)
- 2 法於陰陽、和於術數、陰陽に法り、術数に和す、  
pǐwɑp ʃa ʃəm liɑŋ, yuai ʃa tʃiwət ʃiwə, ([ɔ] 侯)
- 3 食飲有節、起居有常、食飲に節有り、起居に常有り、  
tʃiək ʃəm yǐwə tsiet, khǐə kǐa yǐwə zǐɑŋ, ([aŋ] 陽)
- 4 不妄作勞、妄りに作勞せず、  
pǐwa miwɑŋ tsak lau, ([au] 宵)

- 5 故能形與神俱、 故に能く形と神と俱にして、  
 ka naŋ ɣien ɕia dʒen kiwə, ([ɔ] 侯)
- 6 而盡終其天年、 而して尽く其の天年を終え、  
 n̄iə dzien t̄iuŋ giə thien nien, ([en] 真、句中韻)
- 7 度百歳乃去。 百歳を度えて乃ち去る。  
 da peak siwat nə khĩa.] ([a] 魚) — 『素問』上古天真論篇

新校正注によれば、全元起本および『太素』で、第3行と第4行が次のようになっている。

- 3 食飲有常節、起居有常度、  
 d̄iək iəm ɣiwə z̄iaŋ tsiet, khĩa kĩa ɣiwə z̄iaŋ da, ([a] 魚)
- 4 不妄不作、  
 p̄iwa miwaŋ p̄iwa tsa, ([a] 魚)

陶弘景『養性延命録』の引用では「飲食有節、起居有度、不妄動作」。

第1行「者 [teia]」、3行「度 [da]」、4行「作 [tsa]」、7行「去 [khĩa]」はいずれも魚部 [a] で押韻している。2行「數 [ɣiwə]」と5行「俱 [kiwə]」もいずれも侯部 [ɔ] で押韻し、また魚部と侯部は近傍転で通韻する。

胡石生『素問校義』は「王氏は飲食有常節、起居有常度を改めて、食飲有節、起居有常と為す。則ち句法の虚実対さず。不妄不作を改めて不妄作勞と為す。是れ誤読の作為、作為の作なり。而も作勞を以て連文せるは義を成さず、既に経旨に乖り、又た古人の属詞の法に昧く、且つ有韻の文をして諧読すること能わざらしむるは一挙に三失なり。之に随うこと甚だし、古書の軽く改むる可からざるなり」とする。王冰による誤った改字（妄改字）であるという指摘である。

- ②1 少陽之人、 少陽の人は、  
 [eɕiau ɕiaŋ t̄ia n̄ien, ([en] 真陽)
- 2 謔諦好自貴、 謔諦として好んで自ら貴び、  
 z̄ie tie hu dz̄iei kiwəi, ([əi] 微陰)
- 3 有小小官、 小小の官有れば、  
 ɣiwə ɕiau ɕiau kuan, ([an] 元陽)

- 4 則高自宜、 則ち高ぶり自ら宜しとし、  
tsək kau dzīci ŋjiai, ([ai] 歌陰)
- 5 好爲外交、 好んで外交を為し、  
hu yīwai ŋuat keau, ([au] 宵)
- 6 而不内附、 而して内附せず、  
ŋjə pīwa nuəi bīwə, ([ɔ] 侯)
- 7 此少陽之人也。 此れ少陽の人なり。  
Tsīc eīau líŋŋ ŋjə ŋjien líai.] — 『靈樞』通天

第4行が『甲乙』巻1陰陽二十五人形性血氣不同16ではこうなる。

- 4 則高自宣、 則ち高ぶり自ら宣べ、  
tsək kau dzīci sīwan, ([an] 元)

1「真 [en]」と 2「微 [əi]」、および 3「元 [an]」と 4「歌 [ai]」は陰陽対転。しかし『甲乙』によれば韻部が同じになるだけでなく、2回の「少陽 [eīau líŋŋ]」(1・7) [e] にはさまれて、3「小小 [sīau sīau]」と「宣 [sīwan]」の [s] がともに歯音声を諧和させることになり、全句の音韻構造をより強固にすることになる。「官 [kuan]」と「宜 [ŋjiai]」でも陰陽対転となり通韻するので気づきにくいだが、ここは字形の相似による伝写の誤り(写誤字)と判断し、『甲乙』によって「宣」に改めた方がよいであろう。

- ③1 視深淵尚可測、 深淵を視るや尚お測る可くも、  
2 迎浮雲莫知其際。 浮雲を迎うるや其の際を知らず。

—— 『素問』疏五過論

同文が『素問』六微旨大論にあり、第2行「際」を「極」に作る。1「測」 [tʃhiək] と2「極」 [gīək] はともに職部 [ək] に属し押韻する。

- ④1 謬言爲道、 謬言を道と為し、  
2 更名自功 名を更めて自ら功とす。—— 『素問』微四失論  
第2行「功」を『太素』は「功」に作る。1「道」 [du] と「功」 [kheu] はともに幽部 [u] に属し押韻する。

## [2] 字倒例

字倒例は字倒（倒文・誤倒）や改易による失韻である。

- ① 故曰、  
[ka γīwət,  
故に曰く、
- 2 「天地者、  
thien dīai teia,  
「天地なる者は  
萬物之上下也。  
mīwən mīwət t̃iə zīaŋ ɣea līai.  
万物の上下なり。
- 3 陰陽者、  
īəm līaŋ teia,  
陰陽なる者は  
血氣之男女也。  
hīwət khīəi t̃iə nəm nīa līai.  
血気の男女なり。
- 4 左右者、  
tsai γīwə teia,  
左右なる者は  
陰陽之道路也。  
īəm līaŋ t̃iə du la līai.  
陰陽の道路なり。
- 5 水火者、  
eīwei huai teia,  
水火なる者は  
陰陽之徵兆也。  
īəm līaŋ t̃iə tīə dīau līai.  
陰陽の徵兆なり。
- 6 陰陽者、  
īəm līaŋ teia,  
陰陽なる者は  
萬物之能始<sup>(注3)</sup>也。」  
mīwən mīwət t̃iə naŋ eīə līai.  
万物の能始なり」と。  
——『素問』陰陽応象大論篇

江有誥『先秦韻讀』（第3節既出）は第5句の「徵兆」を字倒例としてこれを次のように改めている。

陰陽之兆徵也。

陰陽の兆徵なり。

iəm ɰian ʃiə diau t̃iə ɰiai.

第2～6句を通じて句末は「也」[ɰiai]という虚字なので韻字がその前に来る虚字脚となる。すなわち第2句「上下」[zɰian ɣea]、第3句「男女」[nəm nia]、第4句「道路」[du la]までは魚部[a]のAAA式3連句韻例となるが、第5句を「兆徵」[diau t̃iə]と改めることではじめて第6句「能始」[naŋ eiə]と之部[ə]のAA式2連句韻例として押韻できるのである。

胡石生『素問校義』(第1章および本章既出)はこの第5句末を改める理由を次のように説明している。

「案、“陰陽之徵兆也”、本作“陰陽之兆徵也”。上三句“下女路”爲韻、下二句“徵始”爲韻。“徵”讀如“宮商角徵羽”之“徵”。洪範“念用庶徵”、與“疑”爲韻(注4)、逸周月篇“災咎之徵”、與“負”“婦”爲韻(注5)、是其證。今作“徵兆”者、後人狃于習見、蔽所希聞而臆改之、而不知其與韻不合也。古書之倒文協韻者、多後人改易而失其讀。」

(案ずるに「陰陽之徵兆也」は、本「陰陽之兆徵也」に作る。上三句「下・女・路」韻を為し、下二句「徵・始」韻を為す。「徵」は「宮商角徵羽」の「徵」の如く読む。洪範「念うて庶徵を用う」、「疑」と韻を為し、逸『周』月篇「災咎之徵」、「負」「婦」と韻を為すは、是れ其の証なり。今「徵兆」に作る者は、後人習見に狃れ、希に聞く所を蔽いて之を臆改し、而も其の韻と合わざるを知らざるなり。古書の協韻を倒文せる者、後人改易して其の読みを失えること多し。)

「“徵”讀如“宮商角徵羽”之“徵”というのは「徵」字に之部の[t̃iə]と蒸部の[t̃iəŋ]という2音があり、通常[t̃iə]と読まれるのは五音の一つの「徵」音としてであったことをいう。

注3)『周易』繫辭「乾知大始」、「坤以簡能」からみて「能始」とは陰陽の大いなるはたらきを示すものであろう。

注4)『尚書』周書・洪範で「七曰明用稽疑、八曰念用庶徵」の2句が押韻していることを指摘したものの。

注5)『太平御覽』卷28時序部13「立冬」に「周書時訓曰」として古逸『周書』時訓篇(月令篇)が引用され、その立冬の時令の候に「若水不冰、即陰之有負」、「若地不凍、即災咎之徵」、「若不爲蜃、即時多姪婦」とある3句が押韻していることを指摘したものの。

- ②1 治之要極、 2 無失色脈。 治の要極は色脈を失うこと無し。  
 3 用之不惑、 4 治之大則。 之を用いて惑わざるは治の大則なり。  
 5 逆從倒行、 6 標本不得、 逆從の倒行し、標本得ざれば  
 7 亡神失國。 神を亡い国を失なわん。

——『素問』移精變氣論

第2句の「色脈」を『太素』は「脈色」に作る。これに従えば1「極」[gǐək]、2「色」[ʃiək]、3「惑」[zuək]、4「則」[tsək]、6「得」[tək]、7「國」[kuək] いずれも職部 [ək] で押韻する。

- ③1 春日浮、 2 如魚之游在波。 春日浮くは、魚の遊びて波に在る如し。  
 3 夏日在膚、 4 泛泛乎萬物有餘。 夏日膚に在り、泛泛乎万物有余有り。  
 5 秋日下膚、 6 蟄蟲將去。 秋日膚を下り、蟄虫將に去らんとす。  
 7 冬日在骨、 8 蟄蟲周密、君子在室。 冬日骨に在り、蟄虫周密に君子室に在り。

——『素問』脈要精微論

錢氏『語言』は第2句「如魚之游在波」は「毛病」(誤り)で、「一段の文采と詩意を全く破壊」するものであるという。「如魚在波之游」であって始めて1「浮」[bǐu]と2「游」[cǐu]が幽部[u]、3・5「膚」[pǐwa]、4「餘」[cǐa]、6「去」[khǐa]が魚部[a]、8「密」[mǐet]と「室」[ʃǐet]が質部[et]で押韻できるのである。これは甲甲乙乙の誤倒、「之游在波」が「在波之游」であるとする説である。

- ④1 凡刺之眞、 2 必先治神。 凡そ刺の眞は必ず先ず神を治す。  
 3 五藏已定、 4 九候已備、 五臟已に定まり九候已に備わり、  
 5 後乃存鍼、 6 衆脈不見、 後乃ち鍼を存せば、衆脈見れず  
 7 衆凶弗聞。 衆凶も聞かず。 ——『素問』宝命全形論

錢氏『語言』は第5句「後乃存鍼」は「後乃鍼存」の倒文であろうとする。そうすると1「眞」[ʃǐen]、2「神」[dǐen]の真部[en]と3「定」[dǐen]の耕部[en]は近傍転で通韻し、また4「備」[bǐə]の之部[ə]と5「存」[dzuən]と7「聞」[mǐwən]の文部[ən]が陰陽対転で、6「見」[kian]の元部[an]が文部[ən]と近傍転で通韻できるのである。

- ⑤1 不知所苦、 2 兩躡之下、 苦しむ所を知らざれば兩躡の下、  
 3 男陰女陽、 4 良工所禁。 男の陰 女の陽は良工の禁ずる所。

——『靈枢』官能

第3句「男陰女陽」を『甲乙』『太素』ともに「男陽女陰」に作る。これが正しければ1「苦」[kha]と2「下」[zea]の魚部[a]で2連句韻例、3「陰」[iəm]と4「禁」[kiəm]が侵部[əm]でやはり2連句韻例となる。

守山閣本注に以下のようにいう。

「原刻“陰陽”二字互訛、依『甲乙』改。按八卷脈度論躡脈云、“男子數其陽、女子數其陰、當數者爲經、不當數者爲絡。”故結絡堅緊、而以火所治之者、男子必取陰躡、女子必取陽躡。若誤施之、是病在絡、而反取其經、誅伐無過矣。」

(原と「陰陽」二字互訛に刻し、『甲乙』に依り改む。八卷脈度を按ずるに躡脈を論じて云う、「男子は其の陽を数え、女子は其の陰を数う。数に当たる者を經と爲し、数に当たらざる者を絡と爲すと。故に結絡の堅緊して火を以て治す所の者、男子は必ず陰躡を取り、女子は必ず陽躡を取る。若し誤りて之を施せば、是れ病絡に在りて、而るに反って其の經を取る、誅伐の過ぐる事無し。)

ここで「互訛」というのは誤倒のことに他ならない。互訛の2字を改正するのに「乙」字を間に朱書するので「互乙」とも云う。

### [3] 字衍例

字衍例は加字(衍文・増字)による失韻である。このような場合は古韻にもとづいて衍文を除かなければならない。

- 1 凡刺之屬、 凡そ刺の属は  
 2 三刺至穀氣、 三刺して穀氣を至らしめ、  
 3 邪僻妄合、陰陽易居、 邪僻妄合し、陰陽居を易え、  
 4 逆順相反、沈浮異處。 逆順相反し、沈浮處を異にす。——『靈枢』終始

銭氏『語言』によれば第1句『属』字は第2句『穀』字とともに屋部[ok]に属して押韻する。第3句『居』字と第4句『處』字とともに魚部[a]に属して押韻する。すなわち

A A B Bの連句韻例であったものが、第2句に『氣』字が増加されたために韻式が破壊されたものと考えられる。そのことは『太素』巻22「三刺」に本文があり、「氣」字がないのでこれは原文に存在しなかった「氣」字が後人の伝抄に際して誤写されたものであると証することができます。『太素』楊上善注「三刺して穀氣を得るなり」参照。

#### [4] 字脱例

字脱例は字脱（脱文・奪文・脱字）による失韻である。このような場合は古韻にもとづいてこれを補正しなければ為らない。

- |              |                       |
|--------------|-----------------------|
| 1 渾渾革至如涌泉、   | 渾渾革として至ること涌泉の如く、      |
| 2 病進而色弊、     | 病進み色弊し、               |
| 3 絃絃其去如弦絶、死。 | 絃絃として其の去ること弦絶する如きは死す。 |

——『素問』脈要精微論

林億・新校正注による『甲乙』および『脈経』は次のように作る。

- |              |                    |
|--------------|--------------------|
| 1 渾渾革革、至如涌泉、 | 渾渾革革として、至ること涌泉の如く、 |
| 2 病進而色、      | 病進み色、              |
| 3 弊弊綽綽、      | 弊弊綽綽として、           |
| 3 其去如弦絶者死。   | 其の去ること弦の絶するが如きは死す。 |

現行本『脈経』巻1-13は第2句を次のように作る。

- |         |          |
|---------|----------|
| 2 病進而危、 | 病進みて危うく、 |
|---------|----------|

銭氏『語言』によればそれは『素問』に脱字があるので意味がわからなくなっているという。(301~302頁)

「革は皮革の革ではなく、ここでは急と読み、急促の意味でなくてはならない。

張介賓注：《革至》は皮革のように堅硬なのである。

高士宗注：《革至如涌泉》とは雑遯という意味を指している。

汪机注：思うにこれは溢脈の類である。

思うに諸注いずれも誤りである。革字は皮革・改革の意味の他に古代には急と読ま

れた。『礼記』檀弓上篇《夫子の病 革なり。以て変わる可からず。》、鄭玄注《革は急なり》、陸徳明『經典積文』《革、紀力の反、並びに又た音は極》。(…)脈要精微論の《渾渾革至如涌泉》には脱文があり、『脈経』『千金』によって《渾渾革革》に作るのがよい。《渾渾》は脈が洪大に来る様子を形成し、《革革》は脈が疾急に来る様子を形容しており、脈象が洪大でかつ疾急であって初めて《至如涌泉》はあふれ出る泉の水勢が疾急で洪大であることを意味している。《病進而色弊》の1句にもまた誤説がある。《色》字は『脈経』にしたがって、《危》に補正すべきであり、洪大疾急の脈象が出現したときは、病状が発展し、また危険であることを意味しているのである。《弊》字の下にはもう1字の《弊》が誤脱している。《縣縣其去如弦絶》の《縣縣》2字と《弊弊》2字は《弊弊縣縣》という4字句をなして《至如涌泉》と押韻するのである。『脈経』の《弊弊綽綽》の《綽綽》も誤りであり、《縣縣》に作るのが正しい。『素問』方盛衰論の王冰注《縣縣は動息の微なるを謂う》。このような考証および校勘の結果、脈要精微論の本段は次のように作るのがよろしいであろう。

- |              |                     |
|--------------|---------------------|
| 1 渾渾革革、至如涌泉、 | 渾渾革革として、至ること涌泉の如きは、 |
| 2 病進而危、      | 病進みて危うく、            |
| 3 弊弊縣縣、      | 弊弊縣縣として、            |
| 4 其去如弦絶、死。   | 其の去ること弦の絶する如きは死す。」  |

『漢字古今音表』では第1句「泉」字は [dʒiwan]、第3句「縣」字は [bǐan] でもに元部 [an] に属して押韻し、また第2句「危」字は同じく [ŋiwai] で歌部 [ai]、第4句「死」字は [siei] で脂部 [ei] にそれぞれ属し、近傍転で通韻する。第1～4句は A B A B 式の交錯韻例をなしていることになる。本例が字脱例として適切な例であるかどうかはわからない。失韻の直接の原因はむしろ、字脱(第1句「革」字、第3句「弊」字)および誤写(第2句「危」字)による誤句読ではないかと思われるからである。また現行本『甲乙』巻4-1は第2～3句を次のように作る。

#### 病進而色 弊之綽綽

森立之『素問攷注』は「案ずるに『甲乙』独り誤らず、宜しく従い改むるべし。《色弊》下の《之》字は必ず是れ古本の潰せるもの、其の《弊弊》に作る者は誤りなり。『素問』に《之》字無き者は後人の刪去を経るなり」とする。

## [5] 句読誤例

- |            |                       |
|------------|-----------------------|
| 1 余念其痛、    | 余 其の痛みを念えば、           |
| 2 心爲之亂惑反甚、 | 心之が爲に乱惑反って甚だしく、       |
| 3 其病不可更代、  | 其の病更代すべからず、           |
| 4 百姓聞之、    | 百姓之を聞き、               |
| 5 以爲殘賊。    | 以殘賊と爲す。 —— 『素問』 宝命全形論 |

錢氏『語言』は人民衛生出版社版横組み活字本の句読例として本例を挙げ、第1句「痛」は東部 [ɔŋ]、第3句「病」は陽部 [aŋ] に属して近傍韻で通韻し、第2句「惑」と第5句「賊」が職部 [ək]、第3句「代」と第4句「之」が之部 [ə]、この両者は陰入対転で通韻する。そこで錢氏は本例の句読を次のように改めるとよいとするのである。

- |          |              |
|----------|--------------|
| 1 余念其痛、  | 余 其の痛みを念い、   |
| 2 心爲之亂惑、 | 心之が爲に乱惑すれども、 |
| 3 反甚其病、  | 反って其の病甚だしくし、 |
| 4 不可更代、  | 更代すべからず、     |
| 5 百姓聞之、  | 百姓之を聞き、      |
| 6 以爲殘賊。  | 以て殘賊と爲す。     |

「以上5方面より、内経の音韻を研究することが、本書の校勘において持つ重要な意義を分析し、幾つかの例を挙げてその類型を分けた。以上に挙げた例文からも、音韻の角度から古書を校勘してみることの重要性が窺えるであろう。」(303頁)